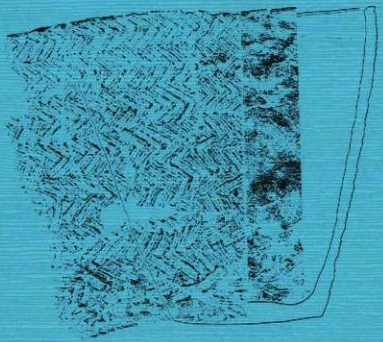
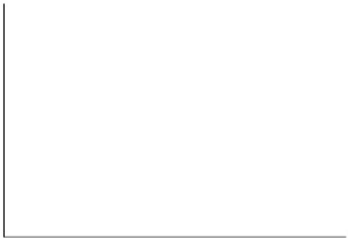
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第８集

尾平・楢原遺跡
楢原遺跡

県営特殊農地保全整備事業中尾地区（楢原工区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



宮崎県埋蔵文化財センター



表紙図　尾平・楠原遺跡出土土器　1

序

埋蔵文化財の保護・活用につきましては、日頃より御理解、御協力をいただき厚く感謝申し上げます。

この度、宮崎県教育委員会では宮崎郡の清武町と田野町にまたがる中尾地区県営特殊農地保全整備事業（楢原工区）に伴い、中尾地区遺跡群の発掘調査を実施しました。

平成６年度の尾平・楢原遺跡の調査におきましては、縄文時代早期や後・晩期、古墳時代中期の遺構が検出され、完形の土器などの重要な資料が得られております。

また、平成７年度の楢原遺跡の調査でも、縄文時代早期、後期、古代といった各時代・時期の遺構・遺物が確認され、この一帯の台地上に、連綿と先人達の遺跡が形成されていることが判明いたしました。

それら、貴重な成果をまとめた本書が、学術資料としてばかりでなく学校教育や生涯学習の場で幅広く活用され、文化財保護のための指針となることを切に願うものであります。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係各機関をはじめ、地元の方々に心からの謝意を表します。

平成９年３月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長　藤本健一

凡　　例

1．本書は、平成６年度・７年度に宮崎県教育委員会が実施した、県営特殊農地保全整備事業（中尾地区楢原工区）に伴う尾平・楢原遺跡、楢原遺跡の発掘調査報告書である。

2．平成６年度に実施した尾平・楢原遺跡、平成７年度に実施した楢原遺跡について収録している。なお、混乱を避けるため、特別な場合を除いて前者を１次調査、後者を２次調査として表記する。遺構番号は、２次調査のものについては21号から開始する。

3．本書で執筆・編集は吉本正典が行った。

4．本書で使用した遺構実測図等の現地における記録は、吉本正典、鎌田次郎、井田　篤による。

5．本書で使用した写真は全て吉本による。

6．遺物の実測・拓本・製図は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。実測・拓本については、整理作業員の補助を得た。

7．本書における方位は、第１図、第２図を除き、全て磁北である。第２図のそれは座標北である。

8．第１図は、国土地理院発行の５万分の１地形図『宮崎』による。

9．図の縮小率は各図ごとに記している。なお、1／3は33％縮小、2／3は67％縮小のことである。

10．土層の色、その他色の表記は、小山正忠・竹原秀夫編・著『新版標準土色帳』を参考にしている。

11．石器の石材（岩石名）については、表面の肉眼観察により決定した。専門的な同定法によるものではない。

12．出土遺物および調査記録類は、全て宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。遺跡の略号は１次調査が5ON、２次調査が5ONⅡである。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査組織 …… 1
第3節　遺跡の位置と環境 …… 3

第Ⅱ章　調査の記録 …… 4
第1節　調査区の設定と調査の概要 …… 4
第2節　尾平・櫓原遺跡の調査 …… 7
第3節　櫓原遺跡の調査

第Ⅲ章　まとめ
図　版

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置 (1:50000) …… 2
第2図　遺跡周辺の地形 (1:2500) …… 5・6
第3図　尾平・櫓原遺跡土層図 (1/60) …… 8
第4図　尾平・櫓原遺跡遺構分布図 …… 9・10
第5図　縄文時代早期面の状況 (1/200) …… 11
第6図　礫群・集石遺構実測図 (1) (1/30)・13・14
第7図　礫群・集石遺構実測図 (2) …… 15
第8図　土器実測図 (1) (1/3) …… 17
第9図　土器実測図 (2) (1/3) …… 18
第10図　土器実測図 (3) (1/3) …… 19
第11図　土器実測図 (4) (1/3) …… 20
第12図　石器実測図 (2/3) …… 22
第13図　1号住居跡実測図 (1/60) …… 25
第14図　1号住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)・26
第15図　1号住居跡出土土器実測図 (2) …… 27
第16図　土器実測図 (5) (1/3) …… 28
第17図　櫓原遺跡土層図 (1/60) …… 30
第18図　櫓原遺跡下段区遺構分布図 (1/400) …… 32
第19図　櫓原遺跡上段区遺構分布図 (1/400) …… 33
第20図　縄文時代早期面の状況 (2) (1/200) …… 35
第21図　礫群・集石遺構実測図 (2) (1/30) …… 35
第22図　土器実測図 (6) (1/3) …… 35
第23図　21号住居跡実測図 (1/40) …… 37
第24図　21号住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)・37
第25図　21号住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)・38
第26図　土器実測図 (6) (1/3) …… 38
第27図　土器実測図 (8) (1/3) …… 40
第28図　土器・陶磁器実測図 (1/3) …… 41
第29図　石器実測図 (2) (2/3) …… 42
第30図　土器1文様拓影 …… 46

報告書抄録

フリガナ 書名	オヒラ ナラハラ　ナラハラ 尾平・楢原遺跡　楢原遺跡
副書名	県営特殊農地保全整備事業（中尾地区楢原工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第８集
編・著者名	吉本正典
発行機関	宮崎県教育委員会
所在地	〒880　宮崎市橘通東１丁目９番10号
発行年月日	1997年３月31日

所収遺跡名	所在地	緯度	経度
尾平・楢原遺跡/楢原遺跡	宮崎県宮崎郡清武町大字今泉甲字尾平・字楢原～宮崎郡田野町字楢原	北緯31° 50′ 55″ ～ 51′ 20″	東経131° 20′ ～ 20′ 20″

調査期間	調査面積	調査原因	種別	主な時代
１次　941109～950123 ２次　950904～960131	１次　4,550㎡ ２次　14,000㎡	農業関連	集落跡	縄文・古墳 古代・中世

主な遺構	主な遺物	特記事項
竪穴住居跡（縄文１・古墳１）、集石遺構	縄文土器・石器、土師器	

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

県営特殊農地保全整備事業の中尾地区（楢原工区）は、昭和48年度から平成８年度までの予定で、208haの面積を対象にほ場整備を行うもので、この地域には周知の遺跡である楢原遺跡、尾平遺跡が含まれるため、宮崎県教育委員会（以下県教委）では平成５年度と７年度に試掘調査を行い、縄文時代早期や古代の文化層の存在を確認している。このため、県教委は埋蔵文化財の取扱いについて関係機関と協議を行った。その結果、平成６年度と７年度の工事予定地内の現状保存が困難と見られる部分については事前に発掘調査を行い、記録を残すことになった。また、遺跡が宮崎郡清武町と田野町にまたがるため、調査主体についても議論が交されたが、遺跡が２町にまたがるため、県教委が主体となって調査を実施することで決着した。

遺跡の名称については、字名より、平成６年度実施部分を尾平・楢原遺跡、平成７年度実施部分を楢原遺跡とした。

発掘調査は、平成６年度は平成６(1994)年11月９日から平成７年１月23日までの間、平成７年度は平成７(1995)年９月４日から平成８年１月31日までの間実施された。

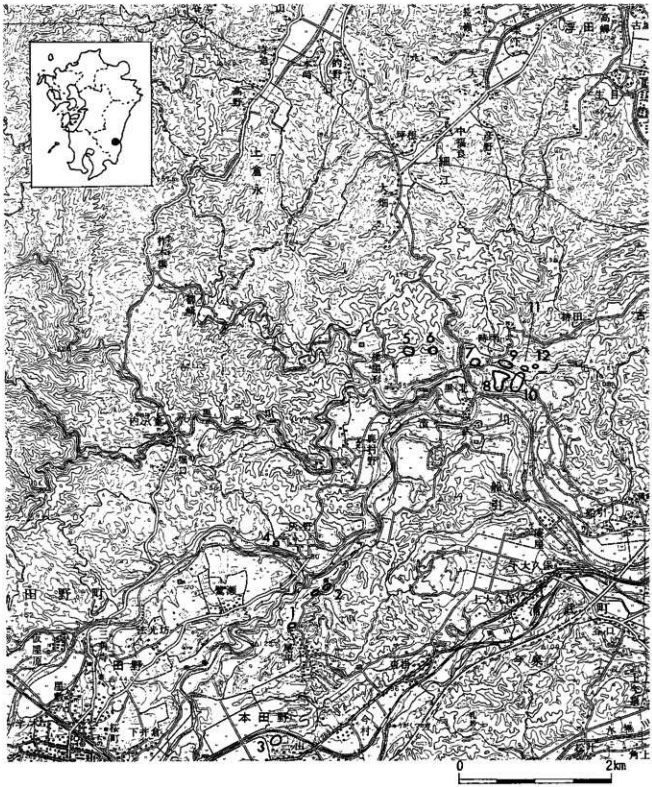
第2節　調査体制

調査主体は前述の通り県教委である。平成６年度と平成７年度の発掘調査および平成８年度の整理作業の実施体制は以下の通り。

教育長	田原直廣
教育次長	八木　洋
	中田　忠

（発掘調査・平成６・７年度）

文化課長	江崎富治
課長補佐	田中雅文
主幹兼庶務係長	高山恵元
主幹兼埋蔵文化財第二係長	岩永哲夫（平成７年度）
埋蔵文化財第二係長	面高哲郎（平成６年度）
埋蔵文化財係主事（調査）	吉本正典
調査員（嘱託）	鎌田次郎（平成６・７年度）
	井田篤（平成６年度）



1．尾平、楢原遺跡　2．楢原遺跡　3．二ツ山遺跡　4．灰ヶ野地下式横穴
5．椎屋形第２遺跡　6．椎屋形第１遺跡　7．上の原遺跡　8．上の原第２遺跡
9．上の原第３遺跡　10．上の原第1遺跡　11．上の原第４遺跡　12．白ヶ野第３遺跡

第１図　遺　跡　の　位　置（1／50,000地形図『宮崎』より）

（整理作業・平成８年度）

埋蔵文化財

センター所長　藤本健一

庶務係長　三石泰博

調査第二係長　北郷泰道

第３節　遺跡の位置と環境

中尾地区の遺跡は、宮崎県宮崎郡清武町大字今泉甲と田野町楢原にまたがる台地上に立地する（第１図・第２図）。遺跡の立地する台地は、宮崎平野の西端近くに位置し、標高は約100m～120mを測る。基盤は南九州特有の入戸火砕流堆積物（通称シラス）で、もろく、特に大雨が降るとしばしば崩落し、災害を引き起こしている。付近にはところどころに、その性質に起因する急崖が見られる。台地の北西側には大淀川の支流の小河川（清武川）が流れている。

周辺には、そういった台地地形を反映して縄文時代を中心とする先人の生活の痕跡が多く認められる。主要な遺跡について、いくつか紹介してみたい。

本遺跡の北東約４kmに位置する台地上には、椎屋形遺跡群（宮崎市大字細江）[1]、上の原遺跡群（宮崎市大字細江～清武町大字船引）[2]、白ヶ野遺跡群（同）[3]などの複合遺跡群が立地しており、中尾地区と同様農業関連、あるいは東九州高速自動車道路関連の事前発掘調査が実施された。従って、多くは膨大な記録と引きかえに消滅しており、記録の整理の作業が今も進められている。椎屋形遺跡第１遺跡・第２遺跡の縄文時代草創期の土器や第１遺跡の弥生時代後期初頭のいわゆる「花弁状住居跡」、上の原第１・第２遺跡の縄文時代中期～後期の竪穴住居・土坑群、上の原第２・第３遺跡の古墳時代前期の竪穴住居群、上の原第２遺跡の近世の屋敷地跡、白ヶ野第３遺跡Ｂ地区の古代の竪穴住居群などが特筆すべき検出遺構・遺物である。

縄文時代早期の遺跡群の発掘調査として注目された前平地区遺跡群（田野町前平字芳ヶ迫ほか）は、本遺跡の南西約3.5kmの丘陵状台地上に立地する。芳ヶ迫第１遺跡、第３遺跡、札ノ元遺跡[4]、又五郎遺跡[5]の各遺跡で「アカホヤ層」（鬼界カルデラの噴火による火山灰・火砕流）下位の文化層より多数の礫群・集石遺構が検出され、札ノ元遺跡、又五郎遺跡では竪穴や炉穴が確認されている。近接した遺跡群でありながら、主体となる土器の型式に違いが見られ、縄文時代早期の土器編年が確立すれば、集団の移動や占地の変遷などといった点に迫りうる好資料と言え、今後とも重要な位置を占めるであろう。

縄文時代早期の遺跡はその他にも、前畑第１遺跡、第２遺跡、砂田遺跡などの八重地区遺跡群（田野町八重字佐野前田ほか）や井出ノ尾遺跡（田野町塩水字井手ノ尾）、二ツ山第１遺跡（田野町二ツ山字二ツ山）など数多く認められ、「アカホヤ層」の遺存する台地には殆ど該期の遺跡があると表現しても言い過ぎではないほど、密度が高い。

また、縄文時代後期の竪穴住居が多数検出された丸野第２遺跡（田野町七野字丸野）[6]は、本遺跡の西南西約６km付近に位置する。竪穴住居は計26基検出されており、それに伴い指宿式、市来式、小池

原上層式、鐘崎式などの土器が多量に出土している。出土土器型式の分析から、竪穴は方形の平面形を呈するものから円形のそれへと変化していったと結論付けている。

他に、古くに発掘調査の行われた青木遺跡（田野町新村字青木）[7]と黒草遺跡（田野町黒草字黒草）[8]の2つの遺跡も縄文時代後期の遺跡として知らされている。いずれも指宿式や市来式、磨消縄文系土器などの土器が出土している。青木遺跡では配石遺構や竪穴も検出されている。

古墳時代では、在地墓制である地下式横穴2基が田野町灰ヶ野で確認されており（灰ヶ野地下式横穴）[9]、蛇行剣、鉄鏃などの副葬品が出土している。いずれも平入り（羨道が長側壁に付く形態のもので、古墳時代後期後半に位置付けられている。

（註）

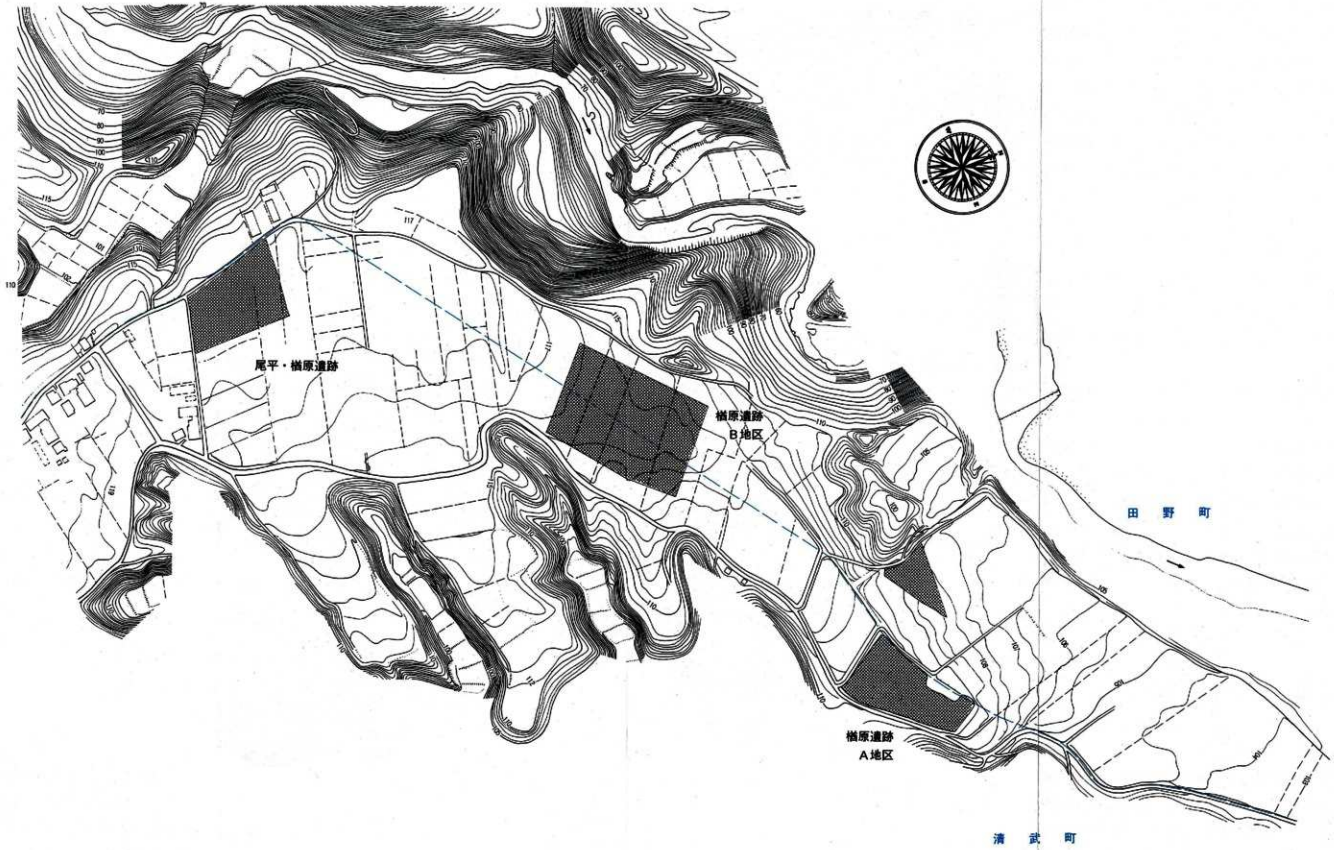
1．『椎屋形第1・第2遺跡』　宮崎市教育委員会　1996
2．現時点では概要報告のみ。
　『上の原第2・第3遺跡』　宮崎県教育委員会　1995　ほか
3．2に同じ
4．『芳ケ迫第1遺跡、芳ケ迫第2遺跡、芳ケ迫第3遺跡、札ノ元遺跡』　田野町教育委員会　1986
5．未報告。下記資料に概要が述べられている。
　『平成3年度宮崎考古学会夏季研究会要旨』　宮崎考古学会　1991
6．『丸野第2遺跡』　田野町教育委員会　1990
7．「宮崎県田野町青木遺跡の調査－縄文時代後期の配石遺構と竪穴の新例－」『日本考古学協会昭和38年度大会発表要旨』　1963
8．宮崎大学史学研究室考古学班　『黒草遺跡』　1971　（ガリ刷り）
9．石川恒太郎　「田野町灰ヶ野地下式古墳発掘調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第17集　宮崎県教育委員会　1973

第Ⅱ章　調査の記録

第1節　調査区の設定と調査の概要

1次・2次調査ともに、まず表土（耕作土）を機械力を使用して除去し、10mグリッドを組んで掘り下げを進めていった。諸々の記録はこのグリッドの杭をもとにしたが、調査の都合上、1次と2次の両調査区のグリッド基線が異なっており、遺憾ながら精密な記録の付き合わせはできなくなっている。1次調査のグリッド基線はN－20°－E、2次調査のそれはN－45°－Eで、それぞれ西方向よりA・B・C…、南方向より1・2・3…として、組み合わせにより区画を表示している。

また、2次調査においては、調査対象地が大きく2か所に分かれたため、北側をA地区、南側をB地区



第2図　遺跡周辺の地形（1／2,500）

と称している。

基本層序は両調査区ともほぼ同一で、当地域の鍵層として重要な位置を占める「アカホヤ層」(前出)が、一部の高所を除いて残存しており、その上下に文化層が認められた。

基本層序は以下に示す通りである（第３図・第17図)。

Ⅰ　層　表土で、近～現代の耕作土。

Ⅱ　層　Hue. 10YR5/6（黄褐)。「アカホヤ層」の二次堆積層。腐植化し、ところどころ黒味が強くなる。遺物を少量包含する。

Ⅲ　層　10YR6/8（明黄褐)。「アカホヤ層」。鬼界アカホヤ火山灰と降下軽石、幸屋火砕流。下部には径１㎜～５㎜程の降下軽石、火砕流がところどころ見られる。

Ⅳ層との層界は不整合面を成し、橙色パミスや軽石などがブロック状に混入している。

Ⅳ　層　10YR3/1（黒褐)。比較的かたい。白色の微小な粒が認められる。また、ところどころ、黒味の強い土塊が混入し、色調まだらとなる。１次調査区においてはⅤ層との層界の不整合面（10㎝～15㎝程のレベル幅）の中で縄文時代早期の遺物が出土しており、狭い時期幅の中におさまるものと考えられる。

Ⅴ　層　10YR3/4（にぶい黄褐)。下部ほど黄色味を増し、褐色に近くなる。

Ⅵ　層　2.5Y4/3（オリーブ褐）を基調とするが、2.5Y2/1（黄灰）～4/2（暗黄灰）のブロックを多く含み、まだらとなる。また、明黄褐色のパミスを若干含む。小林軽石か。

Ⅶ　層　基盤の入戸火砕流堆積物（シラス)。上部は漸移層。

遺構については、まず「アカホヤ層」の上面で精査を行い、１次調査では古墳時代中期の竪穴住居跡が、２次調査では縄文時代後期の竪穴が検出されている。また、縄文時代早期の遺物包含層であるⅣ層・Ⅴ層中からは、礫群・集石遺構が検出された。１次と２次では出土土器に違いがあり、縄文時代早期の中での小さな時期差が認められた。

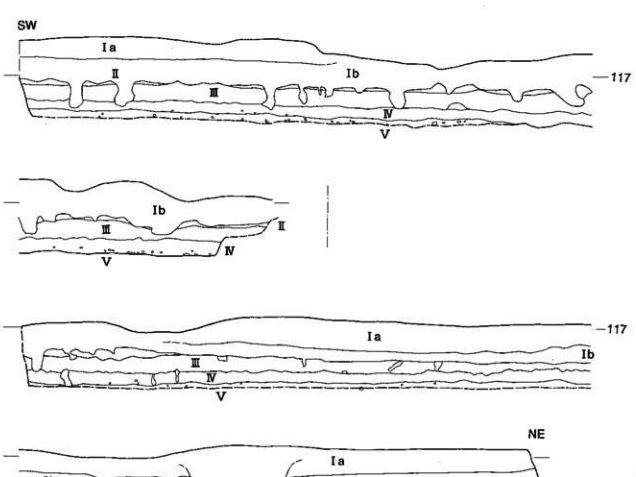
第２節　尾平・楢原遺跡の調査

１．縄文時代早期の遺構

「アカホヤ層」下位の該期の調査については、当初の予定になかったため、限定的な範囲の調査にならざるを得なかった。第4図に示された「縄文時代早期調査区」および「トレンチ」部分が掘り下げを実施した範囲である。全調査区の２割にも満たない。

その中で、調査区の北西側では礫（赤化礫）がまとまって検出され、土器も一定量出土した。そのため、この箇所については礫群の端部を捉える形で拡張していき、面的に記録を残していった（第５図)。

一方、調査区の北東側においては、石鏃が出土したため拡張したものの、土器の出土は希少であり、南側のトレンチでは遺物がほとんど出土していない。これらのことから、調査区の北西側以外では、密度が低くなっているものと推測される。

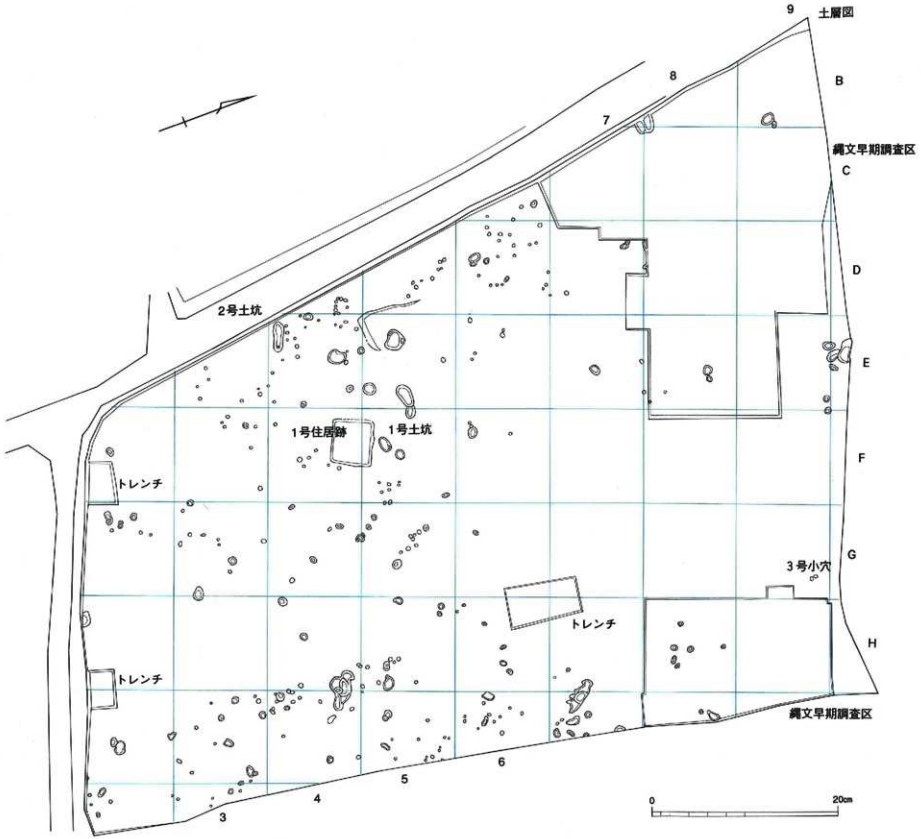


第3図　尾平・楢原遺跡土層図　(1／60)

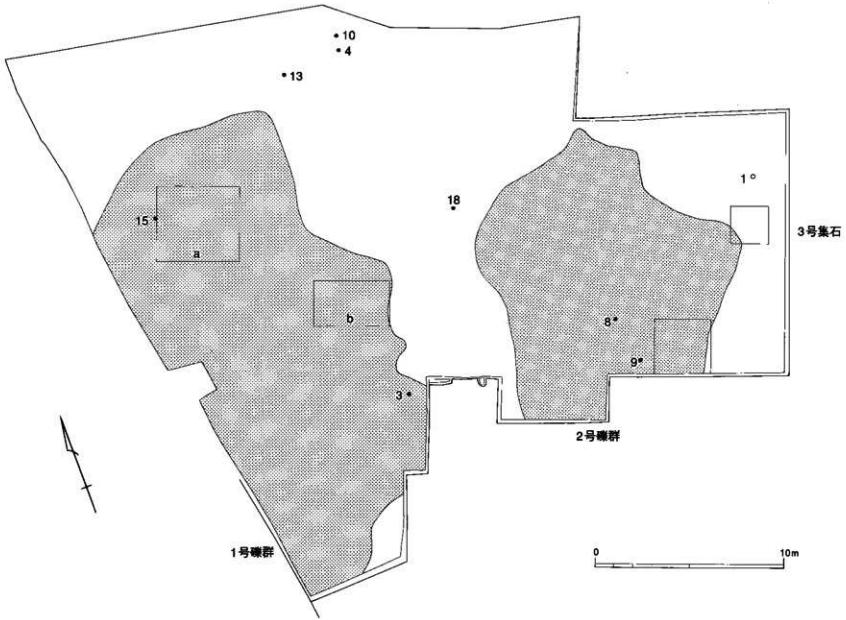
1号礫群（第6図）

B・C－7・8区を中心に広い範囲にわたって赤化礫の分布が広がる。第5図の網かけで示した部分に礫が見られ、ところどころ集中し、集石遺構を形づくっている。集石遺構は6箇所程ありそのほとんどが黒褐色土埋土の掘り込みを持つものである。検出レベルは、先に基本層序のところでも触れたように、Ⅳ層とⅤ層の層界付近である。

第6図では、1号礫群の中の2つの範囲について拾い上げて図示している。集石遺構以外のところでは礫の密集度合いはさほどではない。礫も破砕されたものが多い。反面、AあるいはCとした集石遺構の構成礫などは、完形の度合いが高い。Bの集石遺構は黒褐色土の土坑内に小さな礫が入っているが、密集しているという感じではない。埋土の下部はオリーブ褐色を呈し、炭化物を多く含んでいる。



第4図 尾平・楢原遺跡遺構分布図 (1／400)



第5図 縄文時代早期面の状況 (1/200)

構成礫の間からは、20点程の土器片が出土している。

2号礫群（第7図）

D・E－8・9区で検出されている。これも1号礫群と同様の状況を呈するが、より礫の集中箇所と疎らな箇所の差が大きい。構成礫はほとんどが赤化した破砕礫である。第7図上に示したものは、礫の集中する集石遺構部分である。1.4m×1.2m程の大きさである。やはり黒褐色土の掘り込みの中に礫を投入する。掘り込みの落ち際は不明瞭。

3号集石（第7図）

これも大きくは2号礫群の中の集石遺構と位置付けられるかも知れない。径0.7m程の小型に属するもので、比較的完形度の高い小礫を集めている。

2．縄文時代早期の土器（第8図～第10図）

出土レベルは礫群検出レベルと同じくⅣ層とⅤ層の層界付近である。平面位置については、基本的には第5図に示している。6、7、19は集石遺構の付近より出土している。それらの図面に示されないものについては文中で出土区名を記す。

該期の土器の型式を見ると、貝殻文円筒形土器の一群（中でも1に代表される土器群）が中心となっており、押型文系土器はそれよりも量的に少ない。他にごくわずかながら塞ノ神式土器も認められる。

以下、その分類に従って記述を進めていく。

貝殻文円筒形土器

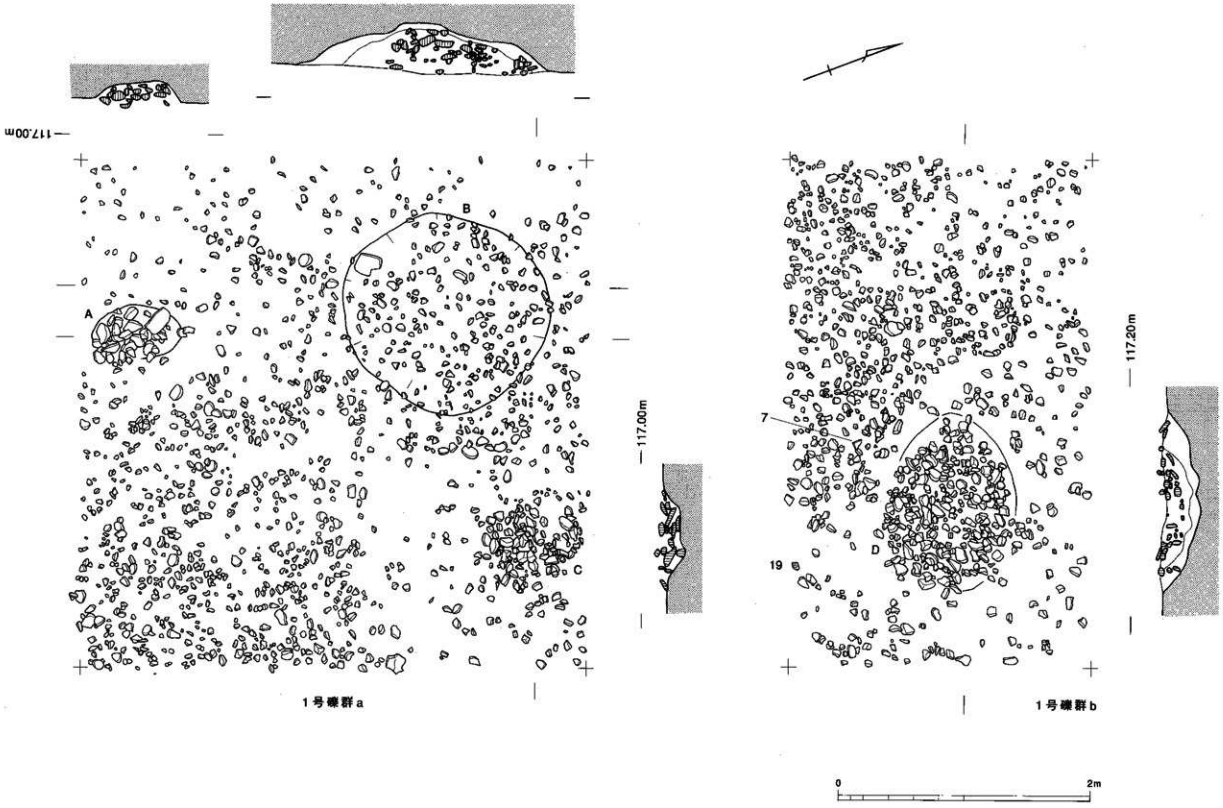
1はE－9区の3号集石遺構近くで出土した土器で、完全な形で遺存していた。出土状況を細かく見ていくと、底面は、礫群の検出レベルとほぼ同一で、層の堆積と平行に座っており、口縁部から胴部にかけての部位が、中に折り重なるように入っていた。その状況から、正立の状態で放置されたものと見られ、底面のレベルは、往時の生活面と考えて差し支えないであろう。

口縁部がわずかに内弯気味になる深鉢形土器で、平底であるが、底面は微妙に凸レンズ状になる。外面には櫛状の施文具（二枚貝の貝殻を割ったものか）による凹部3本単位の文様を、綾杉状に施している。ただし綾杉状と表現したが、厳密には口縁部から底部（底面より5㎝程上位まで）すなわち上から下へ流して（縦方向に連続させて）鋸歯状の文様を施文していると見られ、その重なりによって綾杉状に見えるといった方が正しいであろう。そのためか、文様の頂部（屈曲部）を見てみても横方向にはそろっていない。従って、原則としては上の文様よりも下のそれの方が新しい（切っている）訳であるが、口唇部の列のみ、調整の意味からか最後に施文している。また、底面近くでは施文のパターンが乱れ、綾杉状を成していない。施文は反時計回りに進んでいるようである。

内面および口唇部は丁寧にナデられ、平滑に仕上げている。明赤褐色、にぶい褐色を呈し、底部は二次的火熱のためか、赤く、もろくなっている。胎土中に5㎜程度の白色の小礫や赤褐色粒を含む。

2～14も1と同型式に属するもので、胎土の特徴（混入物）が似る。

2はC－9区出土。凹部6本単位（当たりの具合からか4本・5本になっている箇所もあり）の施文具により鋸歯状の文様を描いている。1同様、内面と口唇部は丁寧なナデ調整。黄褐色・黒褐色を呈する。



第6図　礫群・集石遺構実測図（1）（1／30）

第7図　礫群・集石遺構実測図（2）（1／3）

やはり胎土中に白色の小礫や赤褐色粒を含む。

3は第5図に示した他に、C-9区からも出土している。凹部6本単位の施文具によって、上から下へ連続的に鋸歯状の文様を描いているようである。内面はこれも丁寧なナデ調整。色調は2に似る。やはり胎土中に白色小礫や赤褐色粒を含む。

4はわずかに肥厚する口縁部で、外面に凹部6本単位の施文具による、2同様の文様を施すと見られる。橙色を呈する。内面、口唇部は丁寧なナデ調整。

5も口縁部で、ごくわずかに肥厚させる。C-7区出土。内面、口唇部は丁寧なナデ調整である。この5～7の色調はにぶい灰黄色・暗灰黄色になる。

6は2号礫群の近くで出土している。凹部2本単位の施文具により縦方向の鋸歯状文を描いている。

7もわずかに肥厚する口縁部。1号礫群中で出土している。凹部6本単位の施文具。内面および口唇部は磨きに近い丁寧なナデ調整。

8はほぼ直に立ち上がる口縁部で、凹部2本単位の施文具。内面および口唇部はやや荒れているがおそらく丁寧にナデ調整がなされたと見られる。橙色を呈する。

9はわずかに肥厚する口縁部。凹部5本単位の施文具を用いている。内面および口唇部は磨きに近い丁寧なナデ調整。外面は灰黄褐色を、内面はにぶい褐色を呈する。

10は内弯する器形の口縁部である。凹部2本単位の施文具で縦方向の鋸歯状文を描くものと見られるが、器壁が荒れているため不明瞭となっている。内面は工具によるナデ調整。胎土中には石英や雲母などの鉱物を多く含み、他との違いを見せる。にぶい黄褐色。

11は底部近くの胴部片。凹部7本単位の施文具を用いている。内面は丁寧なナデ調整。外面は橙色、内面は褐色を呈する。

12はC-9区出土。胴部片で、凹部6本単位の施文具を用いている。底部に近いためか、施文パターンが乱れ不規則となっている。内面は磨きに近い丁寧なナデ調整。12～14の外面はいずれも黄橙色となる。

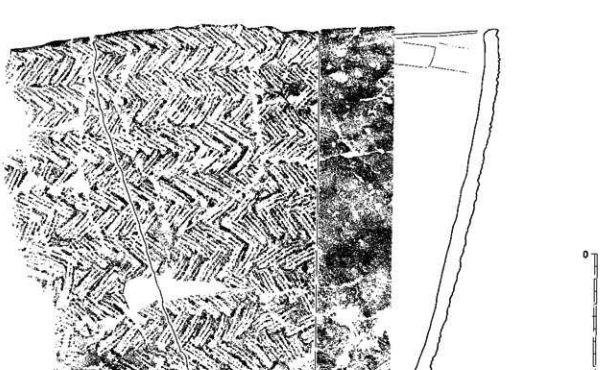
13はC-9区およびD-9区出土。底部片で、二次的火熱を受けて赤色に変化している。そのため、器面がやや荒れている。内面はナデ、底面は丁寧なナデ調整。

14も底部である。C-9区出土。凹部6本単位の施文具を用いている。内面、底面ともに丁寧なナデ調整。

21はD-8区出土。直行する（あるいは実測図では表現されていないが若干内弯気味となる）口縁部を有する小形の深鉢形ないしは鉢形土器である。外面にはナデの調整痕が残るのみで文様等は見られない。このため型式等は判然としないが、内面・口唇部は丁寧にナデ調整がなされ平滑に仕上げられており、1などの貝殻文円筒形土器の一群に近いものと考えられる。また、焼成後の穿孔（円形）が認められる。補修孔であろう。黄褐色・黒褐色を呈する。

押型文系土器

15はゆるやかに外反する口縁部で、外面は縦（やや斜め）方向の、内面は斜め方向の楕円押型文が



第8図　土器実測図（1）（1／3）

施される。胎土中にカクセン石などの鉱物を含む。にぶい黄橙色を呈する。

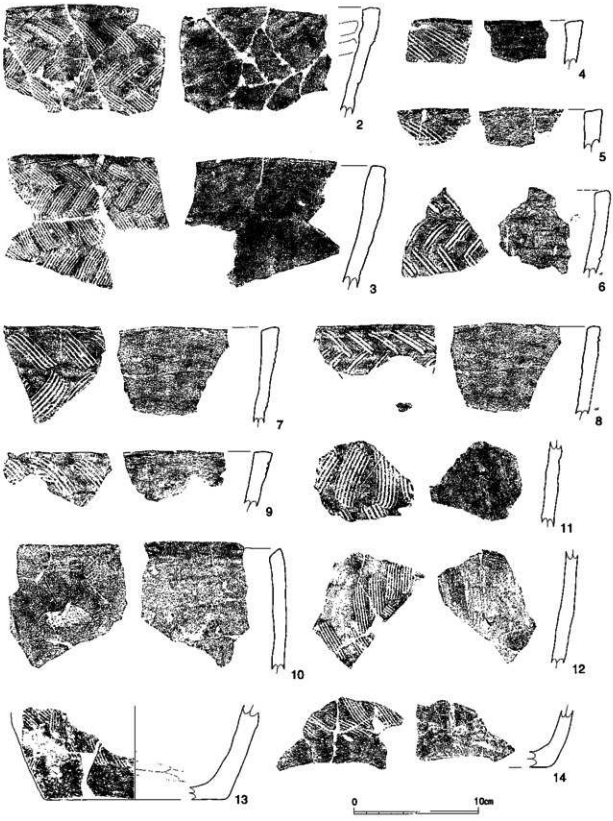
16～18もゆるやかに外反する口縁部。16はH-9区より出土している。内面の上部に縦方向の短沈線文が見られる。外面の上部1.5cm程はヨコナデされて無文となっており、以下は縦方向の楕円押型文が施される。明赤褐色。

17はD-8区出土。外面に縦方向の山形押型文を、内面上部に圧痕文（原体端部によるものか）と横方向の山形押型文を施す。外面は褐色、内面は暗褐色。

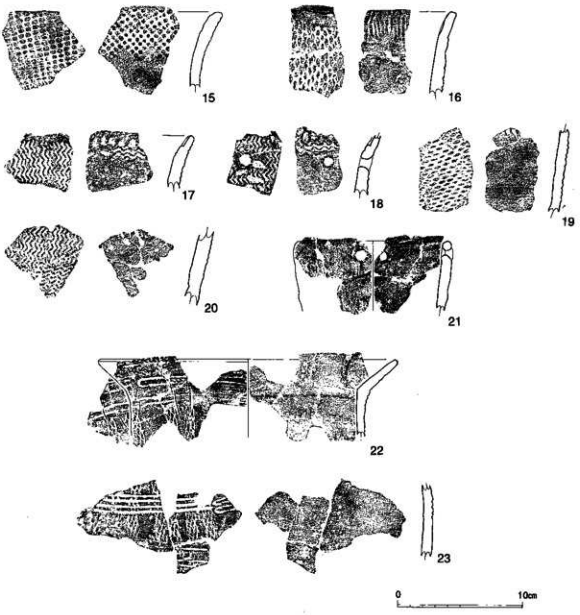
18はD-9区出土。これも17同様の文様構成をとる。補修孔と見られる円形孔が穿たれる。橙色を呈する。

19は1号礫群内より出土している。外面に斜方向の楕円押型文を施す。内面は短沈線文の下端部が認められる。口縁部に近い胴部破片であろう。橙色。

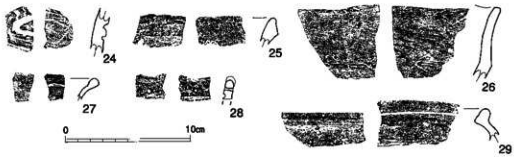
20はC-9区出土。外面に縦方向・横方向の山形押型文が見られる。底部に近い破片と考えられる。



第9図　土器実測図（2）（1／3）



第10図　土器実測図（3）（1／3）



第11図　土器実測図（4）（1／3）

外面は橙色、内面はにぶい黄橙色。

塞ノ神式土器

口縁部が屈曲して外反するもので、屈曲部以下はやや胴部が張るものの基本的には円筒形になる。確実なものは次の２点のみである。

22はC－7区出土。口縁部から胴上部にかけての破片で、C－7区のⅣ層中より出土している。口縁部には横方向の沈線文を、屈曲部以下は縦方向の網目撚糸文を間隔をおいて施している。磨滅・破損のためはっきりしないが、口唇部には刻みを密に付している。内面は丁寧なナデ調整で、屈曲部の稜線は明瞭である。黄褐色。

23もC－7区出土。胴部片で、文様構成が類似することや出土位置が近いことから、21と同一個体である可能性が高い。

3．縄文時代後期・晩期の土器（第11図）

Ⅰ層、Ⅱ層を中心に、「アカホヤ層」の上位の層中より少量出土しているが、まとまる個体はなく、後世に攪乱により遺物包含層が破壊されたものと見られる。

24は後期土器片で、沈線文と貝殻腹縁による圧痕文が認められる。

25はG－2区のⅡ層より出土。口縁部直下に断面三角形の突帯を巡らすもの。

26はH－4区のⅡ層出土。鉢か深鉢の口縁部で、おそらく山形隆起部を持つと見られる。肩部で屈曲するものである。外・内面ともに磨きを施す。

27は、後に紹介する１号住居跡の覆土中より出土している。黒川式に属する浅鉢形土器の口縁部小片。外面は明らかに磨きを施すが、内面については不明瞭となっている。

28も晩期土器と考えられる。E－5区のⅡ層より出土。口縁部の突起の部位であろう。焼成前に貫通孔が穿たれている。

29も晩期土器の浅鉢か。I－6区Ⅰ層出土。外・内面ともに磨きを施し、部分的に黒色化している。

4．石器（第12図）

以下において触れる、図面を掲載した石器は、「アカホヤ」以下のⅣ・Ⅴ層出土のもの（特に、土器と同じくⅣ層とⅤ層の層界付近より出土している個体が多い）で、縄文時代早期に属することがほぼ

確実なものである。Ⅰ・Ⅱ層中からも、若干量の剥片類は出土しているが、後期・晩期の石器の様相については明らかにできなかった。

さて、それらⅣ・Ⅴ層出土の石器の在り方について概観すると、器種では石鏃の割合の高さが特筆できよう。反面、石斧、あるいは磨石・石皿の類は今回の調査範囲内では出土していない。第12図に図示したものは、剥片類（チャートの小片が多い）を除く石器のほぼ全てである。

また出土位置は（調査範囲は限られたものではあるが）、B・C－9区や北東側のトレンチ内に弱い集中箇所があるようである。特に北東側のトレンチでは33、35、36、45の4点が径2m程の比較的狭い範囲内で出土している。また、B・C－9区でも北側の方にかたまっており、礫群から離れた場所において出土する傾向があると言えそうである。

形態を一瞥してみると、38や39、41などの抉りの深いものや、46などの小形の三角形鏃などの当地域において早期に多く認められる石鏃、さらには48のような特徴的なもの（頭部が丸くなるいわゆる異形石器に似る）もあり特に周辺他遺跡の様相と異なるものではなさそうである。石材もチャート、黒曜石、姫島黒曜石、安山岩などがまんべんなく用いられている。

尚、本報告では個々についての記述は行わない。詳細については観察表を参照されたい。

その観察表中の出土層の表記で、「Ⅳ層・Ⅴ層」とあるものは、Ⅳ層とⅤ層の層界付近出土のことである。

5．古墳時代の遺構

F－4・5区において竪穴住居跡が1基検出されている。1号住居跡と名付けられたこの遺構以外には、明確な時期や性格の判明する遺構は見られなかった。わずかに1号住居跡の近くの2基の土坑（1号土坑、2号土坑）中から該期の土師器の胴部とおぼしき破片が出土しているが、まとまるものではなく、時期も不詳となっている。

1号住居跡（第13図）

方形の竪穴住居跡である。Ⅲ層「アカホヤ」層の上面で遺構検出を行った。主軸は北から約25°東方向に振れている。一辺長は4.9m×4.4m、検出面からの深さは約30～40cmを測る。

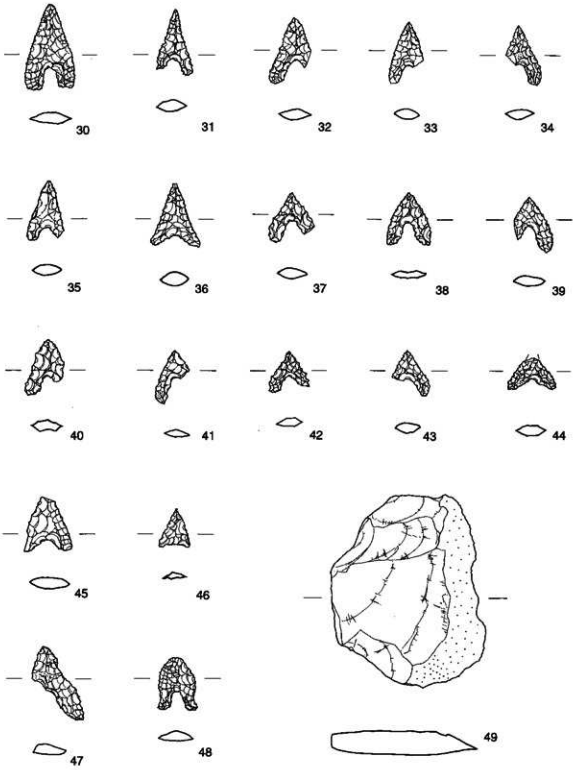
覆土は図にも表われている通り、自然堆積の状況を示している。「アカホヤ」のパミスやブロックを混入しており、特にdとした層には多く含まれている。床面中央部には、黒色土（Ⅳ層土）黄褐色土（Ⅴ層土）、「アカホヤ」ブロックの混土による貼床が施される。

主柱穴はNE－SW方向に並ぶ中央よりの2本であろう。その場合の柱間隔は1.4mである。

2本の柱穴間を結んだ線のやや南西側に1基、さらにその南西側の壁よりにも1基、床面から掘り込まれた土坑が存在した。土坑とするよりは不明瞭な落ち込みと表現した方が適切であろう。

中央よりの方は床面からの深さが約10cm。覆土中には焼土が堆積しており（図中網かけ部分）、屋内炉の役割をはたす箇所であったと考えられる。焼土は床面より7cm程上位に認められた。壁よりの方は床面からの深さが約8cmで、端部に小ピットがある。流れ込んだものか、中から土器片が若干量出土している。

壁際には壁帯溝が巡る。南西側では不明瞭となっていたが、東側などは床面から6～7cm程の深さがあった。南東隅は浅いピット状を呈している。



第12図 石器実測図 (2/3)

表1　石器計測表（1）

No.	器種	出土区	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
30	石鏃	C－9	Ⅳ・Ⅴ	3.35	1.95	0.45	2.2	チャート
31	〃	H－8	〃	2.60	1.40	0.46	0.9	頁岩
32	〃	B－9	〃	2.60	1.65	0.40	1.0	チャート
33	〃	H－7	Ⅳ	(2.40)	1.20	0.40	0.7	頁岩
34	〃	B－9	Ⅳ・Ⅴ	2.33	1.45	0.38	0.8	チャート
35	〃	G－7	〃	(2.35)	1.30	0.40	0.8	頁岩
36	〃	G－6	〃	2.50	1.65	0.50	1.1	姫島黒曜石
37	〃	B－9	〃	2.00	1.80	0.42	0.8	黒曜石
38	〃	〃	〃	2.08	1.70	0.30	1.0	チャート
39	〃	〃	〃	2.20	(1.50)	0.40	0.8	頁岩
40	〃	E－8	〃	(2.20)	(1.50)	0.40	0.9	チャート
41	〃	H－8	〃	(2.10)	(1.32)	0.28	0.5	頁岩
42	〃	B－9	〃	(1.60)	(1.60)	0.35	0.5	黒曜石
43	〃	C－9	〃	(1.80)	(1.40)	0.40	0.6	姫島黒曜石
44	〃	C－9	〃	(1.25)	1.85	0.40	0.6	黒曜石
45	〃	H－8	〃	(2.15)	1.60	0.45	1.5	姫島黒曜石
46	〃	B－8	〃	1.50	1.20	0.25	0.3	姫島黒曜石
47	〃	D－8	〃	(2.85)	(2.05)	0.42	1.4	チャート
48	〃	B－9	〃	2.05	1.55	0.40	1.1	チャート
49	剝片	D－8	〃	7.60	6.10	1.40	66.4	砂岩

遺物は、床面からやや浮いた位置で出土しているものが多い。住居廃絶後、覆土の堆積が進み始めた頃に投棄されたものと推測している。

6. 古墳時代の遺物

1号住居跡出土遺物について触れる（第14図・第15図）。

50～52は甕である。50は口縁部が直に立ち上がる（あるいはところによりわずかに内弯する）。外面の胴上部に斜方向のタタキを施す。底部近くはケズリの痕跡が見られる。それ以外の外面各部位はナデ調整が施され、肉眼ではタタキの痕跡は見いだせない。内面もナデ調整がなされる。胴上部にはススが付着し、胴下部は火熱のため赤色に変化している。胎土中に鉱物粒などの混入物を含む。黄橙色、橙色を呈する。

51も50同様の口縁部となる。また外・内面の調整の手法も50に似るが、51の方が頸部のしまりが弱い。また51の口縁部外面にはわずかに凹凸が認められ、タタキの痕跡と推測される。内面には接合の痕跡が明瞭に残る。外面はにぶい黄橙色、内面は橙色を呈する。

52の口縁部の場合は、むしろ外反気味の直口縁となる。屈曲部の稜線の不明瞭な「く」字形口縁と表現できよう。残存する範囲については、外面の全面にタタキが施される。口縁部では横方向、胴上部では斜方向となる。口縁部ではその後、ヘラ状の工具によって部分的にナデられているが不完全である。内面も工具によるナデが施されるが、一部、接合痕が残る。にぶい黄橙色。

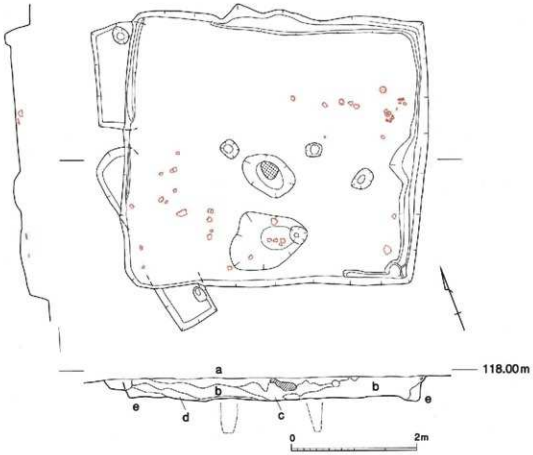
53は一見碗状を呈するが、二重口縁となる小形壺の口縁部と見るべきであろう。外・内面ともに横方向のナデ調整である。胎土中に赤褐色粒が多く含まれる。黄橙色。

54～56は高杯の脚部。54はゆるやかに開いていく形状のもの。外面は磨き、内面脚裾部はヨコナデが施される。柱部は工具によるケズリの後、下部は横方向のナデ調整がなされる。柱部の上部には杯部との接合面が残っており、次に触れる55同様の接合法が採られていたことが分かる。胎土中に鉱物粒や赤褐色粒が少量認められる。にぶい橙色、黄橙色を基調とするが、一部黒斑状の部分がある。

55は柱部と脚裾部の境の稜線が（にぶいながらも）形成されている。外面は器面がやや荒れており、調整については判然としない。内面脚裾部は工具によるナデ、柱部は粗いケズリ状のナデの痕跡が残る。この個体からは、杯部との接合法を推測することができる。まず、円筒状の柱部を成形し、その上端面から粘土紐を積み上げていって杯部を形作り、後に中空となっている杯部と柱部の中央に半円形の粘土塊を詰め込む形をとっているようである。胎土中の混入物としては赤褐色粒が目立つ。明黄褐色、橙色を呈する。

56は脚裾部で、おそらく55のような形態の個体であったと考えられる。端部はヨコナデ、その上位は横、斜方向のナデ調整がなされる。浅黄橙色を呈する。

57は鉢形の粗製小形土器である。1㎝弱の幅の粘土紐を輪積みしていった様子がうかがえる。口唇部はヨコナデ、外面および底面F割合丁寧にナデ調整を行っているが、接合面やひび割れが部分的に残っている。内面上部は横方向のナデ調整、下部は不整方向のナデ調整で、一部工具によるナデの跡も見られる。橙色。



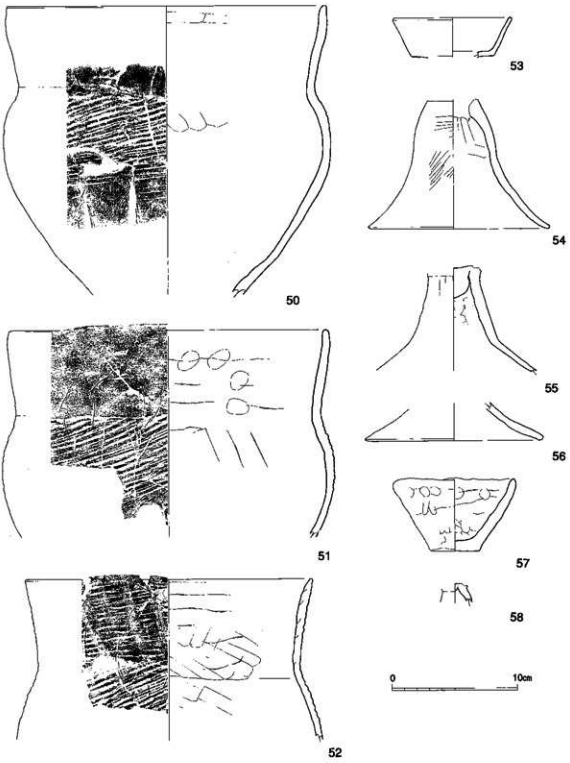
a．2.5Y4／3（オリーブ褐）ところどころ（斜線部）にぶい黄色のブロックを含む。
b．2.5Y3／2（黒褐）橙色パミス（Ａｈ）を多く含む。
c．2に似るが色調やや明るい。
d．ｂと似るが流れ込んだようなブロックを多く含むため、明るい感じ。
e．やはりｂに似るも、橙色パミスの含有率低い。東側ではやわらかい。
以上いずれも炭化物を含む。

第13図　１号住居実測図（1／60）

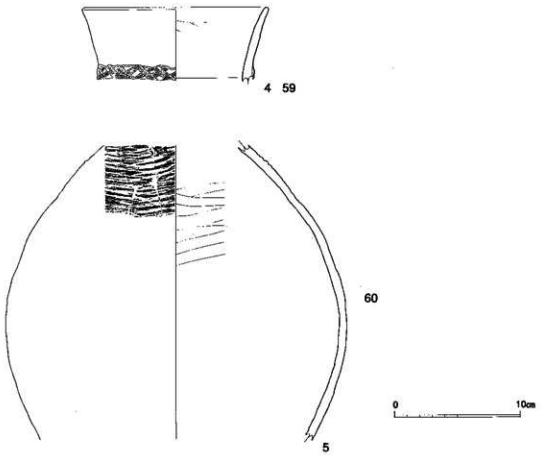
58はミニチュアの高杯脚部。杯部との接合部分には、55に見られるような杯部下面から突き出た突起がある。製作法は54・55のような実用品と同様であったのだろうか。橙色を呈する。

59と60は壷で、接点はないが同一個体と考えられる。

59は外開きとなる口縁部。頸部に突帯を巡らす。突帯には×形の棒状工具による押圧文が付されている。棒状工具に巻き付けた布の痕跡が明瞭に残る。外・内面ともナデ調整。



第14図　1号住居跡出土土器実測図　(1)　(1／3)



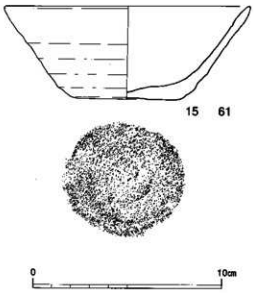
第15図　1号住居跡出土土器実測図　(2)　(1／3)

60はなで肩の胴部。肩部のみ横方向のタタキ痕が見られる。それ以外の外面と内面はナデ調整である。最大径付近の部位にススが付着している。

7．古代の遺物（第16図）

図示した61はG－9区の3号小穴より出土している。土師器の杯で、底部はヘラ切り離し。復元口径12.9cm、底径5.9cm、器高4.9cm、器面はやや荒れている。底面には工具による擦過痕が残る。

古代以降の遺物は少ない。Ⅰ層中より近・現代の陶磁器が少量出土している程度である。



第16図　土器実測図（5）（1／3）

8．小結

尾平・楢原遺跡に残された遺物の中で、過去の「時間の断片」を示していると見られるセットが2つある。縄文時代早期の土器群と、古墳時代後期の竪穴住居跡内の土師器である。それらの意義については既に概要報告書[1]において簡略に触れられている。従って、多少重複するところもあるが、出土位置などの状況説明も交えながら、再度、内容を見返しておきたい。

縄文時代早期に関しては、多数を占める貝殻文円筒形土器の一群と、押型文系土器が「共伴」の関係にあると考えた。礫群の出土レベルであり、また完形土器1の底面レベルで、ある（一定幅の）時期の生活面としたⅣ層とⅤ層の層界付近で集中的に出土していることが根拠である。

主体となる1～14は貝殻文円筒形土器群の桑ノ丸式[2]に属し、対する押型文系土器は、縦・斜方向施文の下菅生B式に含まれるものである。本遺跡の資料は、それらの「共伴」を示す好例であり、桑畑光博・上田耕・雨宮瑞生による想定[3]の検証例となるであろう。また、1の土器の文様も、それらの関連を暗示する材料と考えられる。そのことについては終章で触れる。

1号住居跡出土土器は、厳密な意味での一括資料ではないものの、甕や高杯脚部にはさほどの型式差が認められない。少なくとも、長期間にわたって投棄が繰り返されたような状況ではないと考えられる。タタキを施す甕、倒卵形の壺などの特徴や、須恵器を伴わない点から（「ない」という根拠の脆弱性は認識した上で）、古墳時代中期後半の上薗遺跡2期[4]辺りに比定しておく。

（註）

1．『尾平・楢原遺跡』　宮崎県教育委員会　1995
2．新東晃一　「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』　1　小学館　1989
3．桑畑光博・上田耕・雨宮瑞生『貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係』『南九州縄文通信』7　南九州縄文研究会　1993
4．『上薗遺跡F地区・溜水第2遺跡』　新富町教育委員会　1995

第3節　楢原遺跡の調査

1．調査区の設定について

前述の通り、2次調査の調査対象地は2か所に分かれており、北側をA地区、南側をB地区と称している。そのうちB地区については、1次調査の調査区と縄文時代の遺構・遺物が数多く認められたA地区との中間にあり、遺跡のつながりを知る上で重要な箇所であるが、トレンチによる探査の結果では、Ⅲ層（「アカホヤ層」）上面で時期不明の落ち込みが1基確認され、Ⅳ層とⅤ層の層界付近から石鏃3点が出土した程度であり、遺構・遺物の分布状況は著しく希薄であった。B地区ではⅢ層が全面に見られるため、少なくとも縄文時代早期については後世の撹乱は考慮しなくてよい訳であり、意味を持つ「空白域」とも言える。

一方A地区は、調査対象範囲が、標高の高い側のG～M－4～13区と低い側のA～D－1～7区に分かれるため、便宜的に前者を上段区、後者を下段区と称している。

1．縄文時代早期の遺構（第21図）

遺構はⅤ層中で検出された集石遺構5基が全てである。1次調査時のように礫が一面に広がりその中に集石遺構が含まれるといった在り方ではなく、5基各々が独立して存在していた。

21号集石

上段区では唯一検出された集石遺構で、調査区のほぼ中央のJ－10区に位置する。その付近は遺跡内では最も標高の高いところで、削平が進み、Ⅳ層以上は消失している。そのため遺構は、Ⅰ層除去後すぐのレベルで検出された。断定は難しいが、構築層はおそらくⅣ層下部からⅤ層上部にかけての位置であろう。

径約1.0mの浅い土坑中に、幼児頭大の角礫（一部礫皮面を残す）を投入している。肉眼観察では、赤化した礫は少ないようであった。

22号集石

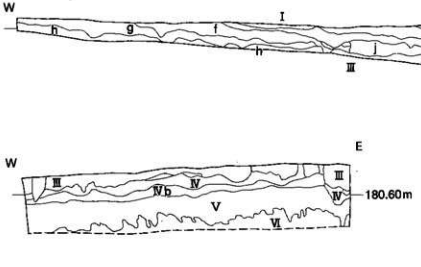
22号集石から25号集石は、下段区の西端部にかたまって見られた。22号集石は、A－3区のⅣ層とⅤ層の層界付近で検出されている。掘り込みは径0.8mのほぼ円形を呈し、その中に赤化した小さめの角礫を投入している。また礫に混じって土器片が数点見られた。礫間には炭化物が認められた。特に土坑埋土の下部に多く、その部分は土色が灰色がかっていた。

23号集石

B－2・3区に位置する。22号同様、Ⅳ層とⅤ層の層界付近の層準に構築されている。径0.9m程の円形の土坑内に、赤化した小さめの角礫が見られた。礫は、わずかな数ではあるが土坑の外の南西側にも続いている。礫間には炭化物が認められる。また、礫間に、62の土器片が見られたが、これは22号の礫間からも出土しており22号と23号の同時性を示すものかも知れない。

24号集石

調査区の北西端にあたるZ－2区のⅤ層中で検出されている。付近にはⅣ層の堆積は認められなかった。径0.9m程の円形の浅い土坑内に、10～20cm程の礫（礫皮面をよく残すものが多い）が密集している。礫はほとんどが赤化している。また、土坑の外側にも、幼児頭大の礫が散在していた。



第17図　楢原遺跡土層図　(1／60)

25号集石

A－3区に位置する。Ⅴ層上部で検出された、弱い礫の集中箇所である。集中範囲は2.0m×0.8m程。礫はほとんどが赤化しており、5～10cm大の破砕された状態のものである。

2．縄文時代早期の土器（第22図）

該期の遺物は、Z・A・B－2～4区付近に集中している。その辺りは、もともと台地端部の標高の高かったところで、Ⅲ層（「アカホヤ層」）は削平されたか流失しており、Ⅱ層（「アカホヤ層」の二次堆積層）の下位にⅣ層、Ⅴ層が見られた。その付近のⅣ層は暗灰黄色を呈し、上部を中心に黄色パミスを含んでいる。色調から「アカホヤ層」直下で認められる牛の糞ローム層そのものにあたるか、その噴出物の再堆積層と考えられる。なお、第17図中のⅣb層としたものはⅣ層とⅤ層の漸移層で、上部にはⅣ層同様白色粒が認められる。土器の多くは、そのⅣb層付近の層準より出土している。手向山式土器や塞ノ神式土器に属する一群が目立つ。

押型文系土器

最終段階の押型文系土器とされる手向山式土器に属するものである。

62は口縁部から頸部にかけての部位で、底部を欠くものの、かなりまとまる破片である。ただし、出土平面位置を見ると（第20図）、破片は10m以上移動しているようであり、廃棄後、ある程度の攪乱を受けたことがうかがえる。このことは、62の出土層であるⅣ層下部（あるいはⅣb層）の性格を示している。

口縁部は外反し、胴部以下は不明であるが、おそらくは屈曲して稜線を形成するのであろう。外面と内面の口縁上部には、2段LRの撚糸を斜めに、交差させて巻き付けた棒状工具を縦走させた撚糸文を施している。内面の口縁部以下はナデ調整である。外面は浅黄橙色、内面は橙色を呈する。

63も口縁部破片である。外面の下部は屈曲部を形成しているようにも見受けられ、内径5.5cm程度（残存部分の割合が高くないため図上では口径の復元を行わなかった）の手向山式土器の小形の個体とも考えられるが、一方で、同型式にしばしば認められる壺形のものである可能性も残る。外面下部の屈曲部としたところ以下は剝落しており、そこを接合面と捉えれば後者とするのが正解であろう。

外面の文様は単位の大きな、縦方向の山形押型文である。内面はナデ調整で、下部の屈曲部以下は粗い工具痕が残る。胎土中に黒色の光沢を有する鉱物を含む。にぶい黄橙色。

64は胴部屈曲部の破片。内面については屈曲部の稜線は不明瞭になる。外面には撚糸文（２段ＬＲの撚紐）を施す。上半部は縦、斜方向に走らせ、下半部は横倒しの菱形モティーフとなる。内面は器壁が荒れており不明瞭であるが、部分的に工具によるナデの跡が認められる。外面は橙色、黄橙色、内面は明赤褐色を呈する。

65はごくわずかに上げ底となる底部片。底面を形成する円盤状の粘土塊に、粘土紐（板状と表現する方が適切か）を積み上げていった様子がうかがえる。外面と底面に撚糸文を施すほか、不明瞭ながら底面には山形押型文を施文しているようである。橙色、にぶい橙色を呈する。外面は二次的火熱を受けている。

塞ノ神式土器

66は口縁部片で、文様は不明瞭であるが、大きく開く器形より塞ノ神式土器の一群に含まれるものと推測される。外面は粗いナデの後、斜方向の条痕文を施していると見られるが、はっきりしない。内面には、指か太い棒状の工具によるナデの痕跡が残る。にぶい橙色を呈する。

67は傾き、上下とも明確にはしえない。口縁下部付近である可能性も残る。区画沈線内に撚糸文を施文する、塞ノ神式土器の典型とも言える文様パターンのもの。一列の刺突による連点文も見られる。内面には器面調整に用いた工具の痕跡が残る。明黄褐色。

68は便宜的にここに含めたが、確証はない。口縁部の近くの部位と見られ、内面の上部にはヨコナデ痕が残る。傾きは不明であり、図上では直立に近い形で復元したが、もう少し外開きになる可能性もある。

外面には斜方向に沈線文が描かれる。沈線は断面が「Ｖ」字を呈し、深く、鋭い。その特徴が沈線文主体の塞ノ神式土器のそれに似るように見受けられる。白色の粒を多く含む。褐色。

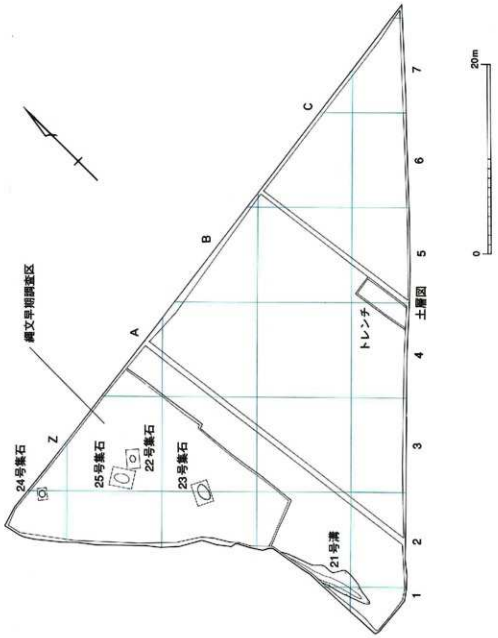
それらの早期土器の出土位置に関しては、第20図に示している。62の説明中でも触れた通り、層の形成中の撹乱や地形の傾斜などの要因により、土器の廃棄後に二次的に移動しているものと見られる。

また、元々の遺物取り上げに関しても、土層の判別が難しかったことや、堆積状況が一定でなかったことなどより、若干の混乱が生じた。

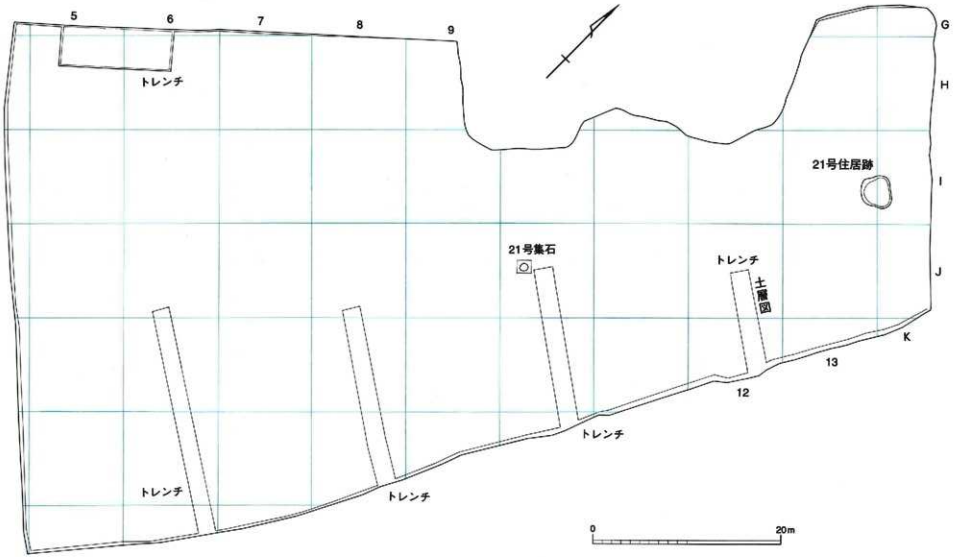
３．縄文時代後期の遺構

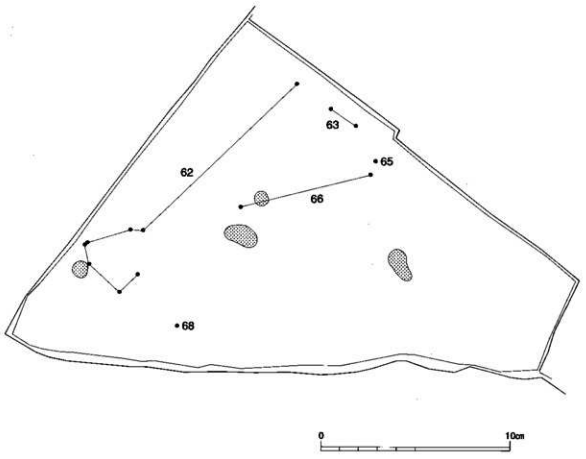
Ｉ－13・14区で、円形プランの竪穴住居跡が１基検出されている。検出面はⅢ層（「アカホヤ層」）上面。21号住居跡と名付けた。

なお、付近にはその他にも落ち込みが数基認められたが、いずれも不整形であり、壁面、床面とも凹凸が著しいことから、それらは人為的なものではなく、風倒木の痕跡と考えられる。



第18図　楢原遺跡下段区遺構分布図　(1／400)
(右頁) 第19図　楢原遺跡上段区遺構分布図　(1／400)


5
6
7
8
9
G
H
I
J
K
12
13
トレンチ
21号住居跡
21号集石
トレンチ
土層図
トレンチ
トレンチ
トレンチ
0
20m



第20図　縄文時代早期面の状況　(2)　(1／200)

21号住居跡（第23図）

径は3.1m～3.4m、検出面から床面までの深さは約40～60cmを測る。中央部の床面には深さ10cm程の浅い土坑があり、その覆土中（土坑底面よりは数cm上位のレベル）には少量の炭化物が含まれていた。

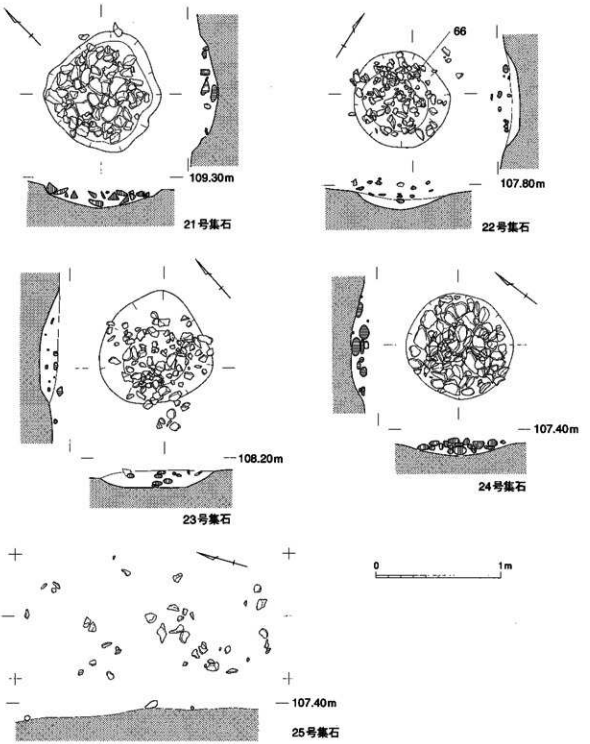
土層図より遺構廃絶後の覆土の堆積状況を読み取るならば、まず基盤層のブロックにより構成されるｄが堆積し、続いてブロックを多く含んだｂ・ｃが流れ込み、そして最後に残った凹部に黒色土のａが堆積する、といった図式になると考えられる。

柱穴については、主柱穴にあたるものが見当たらず、壁面近くに５基の小ピットと１基の小土坑が検出されたのみであった。それらピットが上屋構造を支える柱穴である可能性も否定はできないが、北半部において検出できなかった点は疑問が残る。

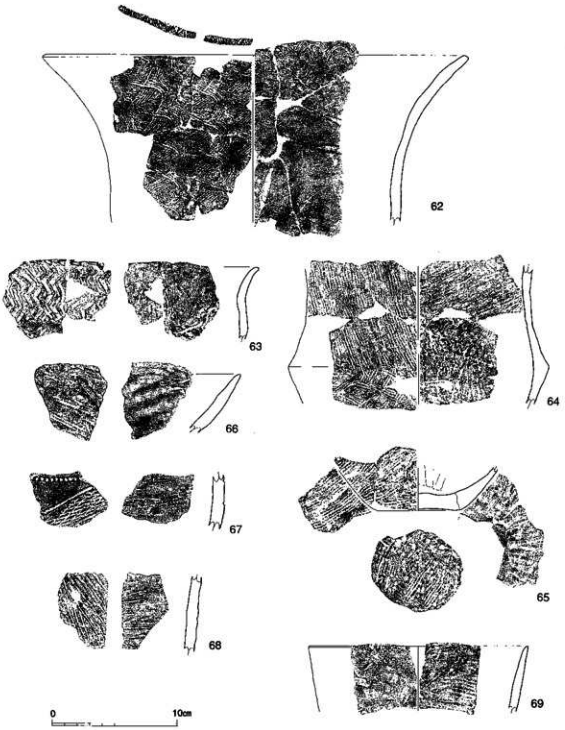
遺物は土器を中心に多量出土しており、多くは床面よりもかなり上位のレベルからのものである。

4．縄文時代後期の遺物

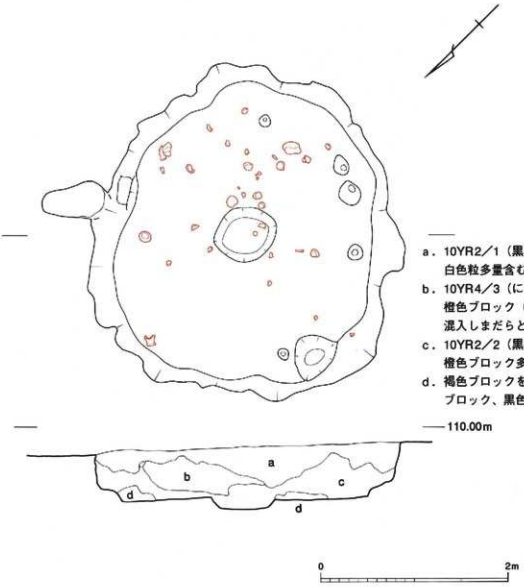
まず、21号住居跡出土遺物について触れる（第24・25図）。



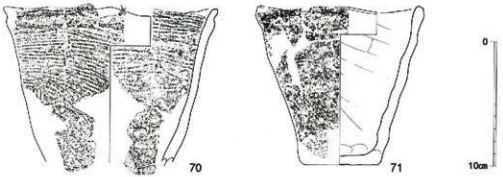
第21図　礫群・集石遺構実測図（2）（1／30）



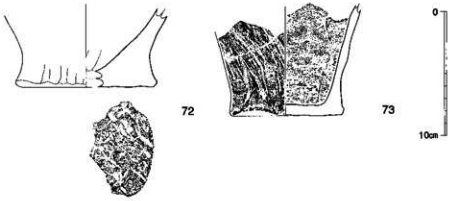
第22図 土 器 実 測 図 (6) (1／3)



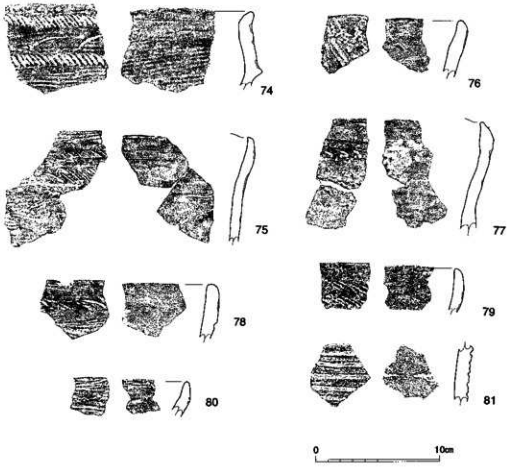
第23図　21号住居跡実測図（1／40）



第24図　21号住居跡出土土器実測図（1）（1／3）



第25図　21号住居跡出土土器（2）（1／3）



第26図　土　器　実　測　図（7）（1／3）

21号住居跡出土土器

70は復元口径17.0cm程の小形の深鉢である。口縁部をわずかに肥厚させ、そこに不明瞭な凹線を引いている。外面の肥厚部より下の胴上部と内面の上半部には貝殻による条痕が施される。外・内面ともに下半部は器壁が荒れ、条痕がはっきりしない。二次的火熱の影響か。橙色を呈する。

71も小形の深鉢で、70同様口縁部はわずかに波状となる。復元口径13.5cm、器高12.5cm。底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、胴部はふくらみを持たない。波頂部を中心に、ごくわずかに口縁部を肥厚させているように感じられる。外面には部分的に条痕が認められる。内面は粗い工具によるナデ調整である。黄橙色。

72は底部片。底面が外方に張り出す形態のものである。底面には圧痕が見られる。いわゆる網代底の一形態であろう。外面は工具による縦方向のナデ（削りに近い）調整。内面もナデ調整。胎土中に白色の鉱物を含む。橙色。

73は底部から胴下部にかけての部位である。底径は9.0cm。造りや全体的な特徴は72に似る。ただし底面に圧痕等は見られない。外面には貝殻条痕を施す。最下部は72同様、削りに近い。内面調整は工具による不整方向のナデ調整。橙色。

以上の土器群は、縄文時代後期中葉の市来式土器系統のものである。

包含層出土土器（第26・27図）

主にⅡ層中から該期の土器が若干量出土している（第26・27図）。

74～80は貝殻腹縁圧痕文や貝殻条痕を特徴とする土器群である。

74は口縁部が逆「く」字形に屈曲するもので、口縁端部は短く屈曲する。外面には２列の爪形文と、その間を埋める弧状の貝殻腹縁圧痕文が施される。内面には貝殻条痕が認められる。橙色を呈する。

75は外開きになる口縁部片で、いわゆる波状口縁を成す。口縁端部は内弯する。外面には貝殻腹縁圧痕文とそれを切る沈線文が施される。内面はナデ調整であるが、わずかに貝殻条痕の跡とおぼしき凹凸が観察できる。橙色。

76も端部がわずかに内弯する。外面に貝殻腹縁圧痕文と条痕文が施文される。内面はナデ。黄橙色を呈する。

77も75同様の特徴を有する。外面に２列の貝殻腹縁圧痕文（下段は明瞭でない）を巡らせる。内面はナデ調整。外面は橙色、内面は黄橙色となる。

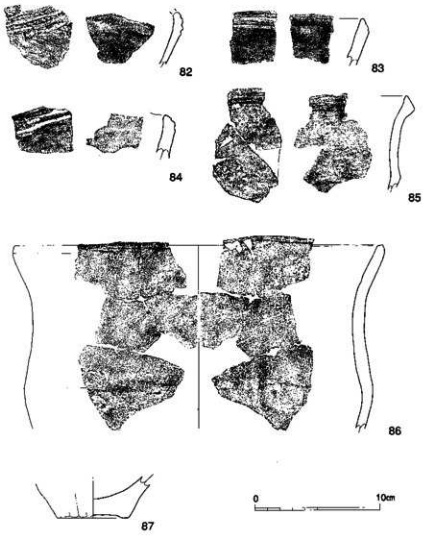
78～80も同系統の土器群に属するものである。78には横方向の沈線文が見られる。いずれも内面は丁寧にナデ調整している。色調も橙色系を呈する。

81は平行沈線文を施す胴部片。沈線は断面「Ｖ」字の鋭いものである。内面はナデ調整。外面は灰褐色、内面は橙色を呈する。

82～87は磨消縄文系、あるいはそれらに伴う粗製の土器群である。

82は口縁端部が内弯し、そこに３～４条の横方向の沈線文や凹点文を施す。そこより下位には細かい繊維痕の残る工具ナデ調整を行っている。波状口縁となる。内面は丁寧なナデ調整。橙色。

83・84は口縁端部を文様帯として、２条の横方向の沈線文を描くもの。いずれも内面は丁寧なナデ調整で、橙色を呈する。



第27図 土 器 実 測 図 (8) (1／3)

85は口縁部に断面三角形の肥厚帯を有する。口縁部はゆるやかに外反し、胴部は屈曲する。外・内面ともに磨きに近い丁寧なナデ調整を行う。灰褐色を呈する。

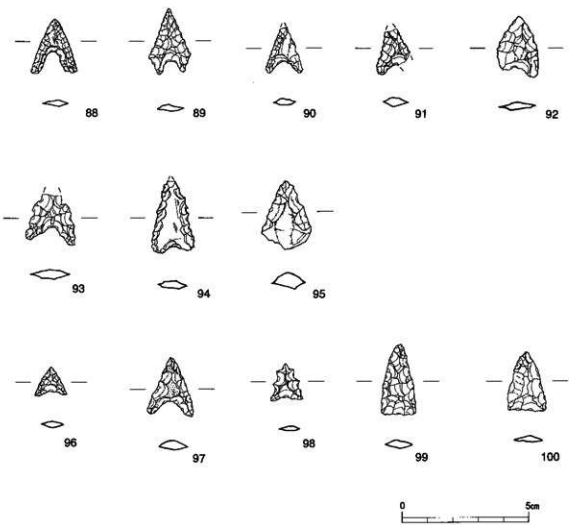
86は粗い製深鉢の口縁部～胴部片。胴部は張り、鈍く屈曲する。外・内面ともに無文でナデ調整痕が残る。黄灰色、にぶい黄色を呈する。

87はわずかに上げ底となる底部。外面には縦方向のナデの痕跡が見られる。内面は丁寧なナデ調整。浅黄橙色。

なお、第22図の69は便宜的にこの項で扱うことにする。直に開く口縁部片で、外面はナデ、内面は貝殻条痕を施す。「Ⅳ層出土」として取り上げたが、乾燥時には色調の似るⅡ層出土であった可能性もあり、その特徴からしても、前期～中期の所産と見られる。

5．石器（第28図）

縄文時代の石器については、ここで一括して触れる。



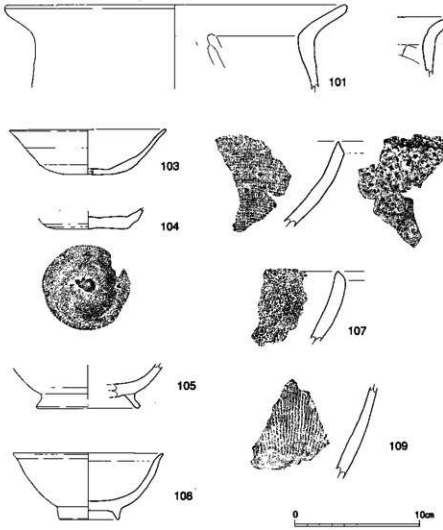
第28図 石 器 実 測 図 (2) (2/3)

表 2 石器計測表 (2)

No.	器 種	出土区	層 位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材
88	石 鏃	I - 5	Ⅳ	2.2	1.9	0.3	0.7	
89	〃	H - 5	Ⅴ	2.7	1.7	0.3	0.9	
90	〃	L - 6	Ⅳ	(1.85)	1.5	0.3	0.5	
91	〃	B - 5	Ⅴ	(1.8)	(1.4)	0.3	0.6	
92	〃	J - 8	Ⅴ	1.55	2.5	0.3	1.1	
93	〃	B - 2	Ⅳ	(2.0)	1.95	0.35	1.0	

表 3　石器計測表（3）

No.	器種	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材
94	石鏃	J－6	Ⅳ	(2.85)	1.8	0.3	1.4	
95	〃	Z－2	Ⅴ	2.7	2.0	0.65	2.6	
96	〃	L－5	Ⅲ	1.15	1.3	0.25	0.2	
97	〃	D－3	Ⅱ	2.4	1.85	0.4	1.0	
98	〃	H－5	Ⅴ	1.55	1.3	0.25	0.6	
99	〃	－	Ⅱ	2.85	1.4	0.45	1.8	
100	〃	－	Ⅱ	2.35	1.6	0.35	1.3	



第29図　土器・陶磁器実測図（1／3）

出土した石器類の構成を見てみると、石鏃がそのほとんどを占めており、それ以外では若干数の剥片が見られたに過ぎない。この点は、1次調査の状況と似通っている。

出土層は、89・93・94がⅣ層、88と90～92・95がⅤ層、96がⅢ層、97・98～100がⅡ層となっており、土器群との関係から推定するならば89～95は早期、98が～100は後期に属するものか。96・97については形態から早期に属する可能性が高いと考えられる。

なお、詳細は第2表を参照のこと。

6．古代～中世の遺物（第29図）

該期の遺物も少なからず見られたが、全てⅠ・Ⅱ層中から散発的に出土しており、元々存在した遺物包含層が後世に撹乱を受け、破壊された結果と考えられる。

101・102は土師器甕の口縁部。ともに屈曲は鈍く、稜線は明瞭でない。または砂、小礫を多く含む胎土の特徴からか、(特に101は) 外・内面ともに器面が荒れており、調整もはっきりしない。わずかに内面の頸部以下は削りを施している様子がうかがえる。101は橙色、102はにぶい黄橙色。

103・104は底部ヘラ切りの土師器杯。103の復元口径は12.6cm、器高は3.7cm、104の底径は5.6cm。

105は高台付の土師器碗。復元高台径は8.4cm。内面は磨きを施す。

106・107は内面に明瞭な布痕を残す製塩土器。外面は凹凸が著しく、また二次的火熱を受け、赤色に変化している。

108はほぼ完全に遺存する白磁碗。灰白色を呈する。口縁部を外反させ、体部は丸みを持つ。全面に施釉されている。外面の胴下部に段を有する。器肉に比較的厚い。内底見込み部分に重ね焼きの目跡が見られる。

109は陶質の摺鉢の底部付近。

7．小結

楢原遺跡の調査（前述の通り2次調査とする）では、縄文時代早期の集石遺構や後期の竪穴住居跡を検出し、各々の時期に属する遺物を得ることができた。

縄文時代早期の遺物包含層（Ⅳ層・Ⅴ層）は、手向山式土器、塞ノ神式土器の出土から早期後葉の相対年代が導き出される。しかしながら、土器の型式と層、出土レベルの細かい対応ができなかったため、いわば大枠の括り方に止まってしまった。そこで、同じく早期の遺物包含層の認められた1次調査の成果と比較することで、その特徴を捉えていきたい。

まず、出土した土器型式について見てみよう。1次調査では、貝殻文円筒形土器の桑ノ丸式と押型文系土器の下菅生B式に属するものがⅣ層とⅤ層の層界付近より出土しており、それらは共伴関係にあると推測した。また少量の塞ノ神式土器も出土している。

一方、2次調査で出土した手向山式土器は、当地域の押型文系土器の終末型式とされ、下菅生B式と手向山式土器では明らかに前者の方が古い。また、塞ノ神式土器は1次調査出土のそれとは違い、区画沈線内に撚糸文を施文するものである。このように、両調査地区ではいくつかの土器型式が確認されているが、主体となる土器群とその出土層について考えると、1次調査区で確認された文化層の方がより古期に属することが分かる[1)]。

唯一確認された遺構である礫群・集石については、明瞭な様相の違いを示している。1次調査区では、径20m程の範囲内に赤化礫を含む小礫が散在し、ところどころ集中箇所（下部に掘り込みを有する）を形成する。それに対して2次調査区の方では、径1m弱の浅めの土坑内に赤化した礫を投入するもので、まとまった形の礫はそれらの集石の外では認められない。

礫群・集石に関する以上の事例をごく単純に解釈するならば、それらの形態的相違は時期差に起因するもので、1次調査の礫群（桑ノ丸式、下菅生B式期の所産）から2次調査の集石（手向山式土器期あるいは塞ノ神式土器期）へと変化するということになろうが、他方、埋没した時点における、集石構築・作業過程の段階の差異を示している可能性もある。概要報告書[2]でも述べられている通り、1次調査で検出された礫群などは（調理のための施設という仮説に沿った場合の）礫の準備→加熱→使用→廃棄といった礫利用のサイクルの総体の現出（その遺存体）である可能性が指摘できる。無論、それらの資料から礫利用のサイクルを明瞭に捉えるためには、細かな分析と検討が必要となるが、現段階ではその作業が終了していない。

このように、早期の遺構・遺物に関しては、出土層の安定性に疑問が残るものの、1次調査区の資料と併せれば、小河川沿いの台地に展開する遺跡群内における移動や占地の変遷といった点に迫るための好材料と言えよう。

縄文時代後期に関しては、1基確認された竪穴住居跡から中葉に属する土器資料を得ることができた。すでに触れた通り、多くの遺物は覆土の上層部からの出土であったが、70・71などの遺存状況のよい個体は遺構廃絶の時期を示すと推測される。それらの土器は、市来式の中でも終末期に近い特徴を示しており[3]、あるいは少量出土している西平式系統の土器と時間的に近い関係にあるのかも知れない。また包含層出土の74は、やはり市来式の終末段階の丸尾式土器[4]の特徴を備えている。75・77は丸尾式土器段階の屈曲口縁部のさらに退化したものか。

また、明確な遺構は確認されず、遺物包含層も失われていたものの、古代～中世の遺物、特に内面に布痕を残す製塩土器の出土については注意を払っておかねばならない。

（註）

1．2次調査における早期の遺物包含層はⅣ層・Ⅴ層で、手向山式土器、塞ノ神式土器もⅤ層中から出土している。そうした場合、1次調査において桑ノ丸式、下菅生B式がⅣ層とⅤ層の層界付近より出土しているという事実と、土器型式の前後関係に矛盾が生じる。あるいは、両調査地区の「Ⅴ層」は色調は似るものの、成立時期の異なる層であるのかも知れない。2次調査での出土位置が傾斜地にあたることや手向山式土器、塞ノ神式土器が混在して出土することから、そこでのⅤ層はプライマリーなⅤ層が再堆積した可能性もある。

2．『尾平・楢原遺跡』　宮崎県教育委員会　1995

3．本田道輝　「市来・一湊式土器様式」『縄文土器大観』　4　小学館　1989

4．前迫亮一　「異系統土器文化の接点－南九州における縄文時代後期中葉の一様相：丸尾式土器の提唱」『南九州縄文通信』　6　南九州縄文研究会　1992

「丸尾式土器」を市来式土器「様式」の終末に属する型式として、従来の草野式土器を包括する形で設定している。74はＡｂ類深鉢、79はＢｂ類深鉢となる。

第Ⅲ章　まとめ

第1節　結　語

2か年度にわたる調査の成果については、簡略ながら既にそれぞれの遺跡（調査区）の「小結」として纏めた通りである。特に、縄文時代早期については両遺跡ともに文化層が認められ、ある程度継続的な生活の場であったことが知れる。また、縄文時代後期、古墳時代には、それぞれ1基のみ竪穴住居跡が検出されているが、周囲の状況から推測すると、数軒単位の規模の小さな集落の一部と見ることができよう。ただし、古墳時代に関しては、調査区の南側の畑地に遺物が分布しており、遺構の分布域がのびていく可能性もある。

第2節　縄文早期土器の施文方法、施文具に関して

今回報告した出土土器の中で、遺存状況の特に良好な2点について、施文方法、施文具の追求を行ってみたい。

まず、1次調査で出土した1（表紙および第8図）について。これについては前章でやや詳しく記述したつもりであるが、再度触れておきたい。

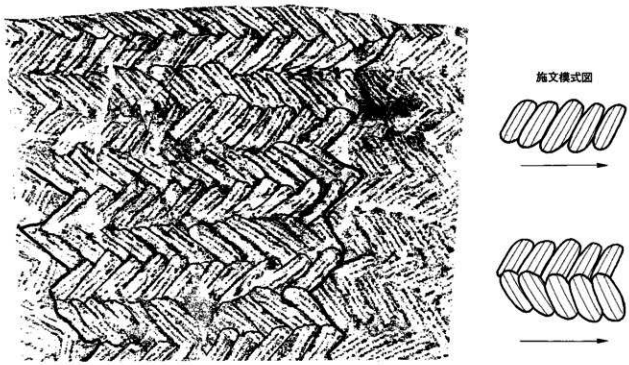
第30図は、外面に施文された綾杉状の文様の拓影（口縁部から胴部にかけて）である。判明するものについては施文単位、切り合い関係を描き加えている。説明の都合上、縦方向の文様の並びを「列」、横方向の文様の並びを「行」と表記する。

前章では、施文は「上から下に流して」行っていると述べたが、正確には7～10の「列」のまとまり（幅約10cm程）を一単位として施文していることがわかる（模式図参照）。そのまとまりを「単位列」としておく。図では3つの「単位列」を確認できる。この「単位列」は反時計回りに進行しており、図中ではAからCの方向となる。さらに一つの「単位列」内の「行」について見ると、例外はあるものの、やはり反時計回り（図では左から右）に施文が行われている。右利きの製作者が正立の状態の土器に施文を行う場合には、自然な向き言えようか。

このように、単純に縦方向の「列」や横方向の「行」を重ねるのではなく、「単位列」ごとに「行」を形成していく施文方法を採っている点は注目に値する。推測であるが、原体を回転させて施文する押型文の潜在的な影響があったのかも知れない。

次に、62について触れておきたい。この土器については、前章では器形より手向山式土器に含めて考えたが、それよりも時期的に遡る可能性もある。鹿児島県石峰遺跡の同様の土器は「変形撚糸文土器」として報告されており、さらに「変形撚糸文」と楕円押型文を併用した土器も見られる。報告にあたった河口貞徳は、「縄文系の土器文化が早くより存在した本地方に、押型文系が伝播するや直ちに縄文系文化と結びついた」結果生じた個体であると解している[1)]。

外面に施された撚糸文は、直径0.73cmの軸に、数本の密接する撚紐を8の字状に巻き付けたものが原体である。原体の長さは約4.0cmを測る。撚紐は、圧痕から判断すると2段ＬＲの撚りと見られる。



第30図　土 器 1 文 様 拓 影

以上、報告のまとめとしてはいささか些細とも思える内容のことであり、見落としや誤りを犯している可能性も否定できないが、該期の土器の文様に重要な情報が内包されている、という事については言を待たないであろう。特に、1の土器の文様は貝殻文系と押型文型の共伴という問題に迫りうる材料と評価できる。

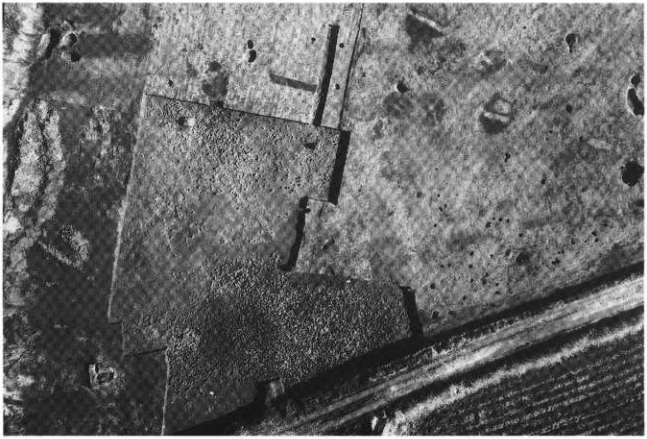
(註)

1．河口貞徳ほか　『石峰遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書12)』　鹿児島県教育委員会　1980

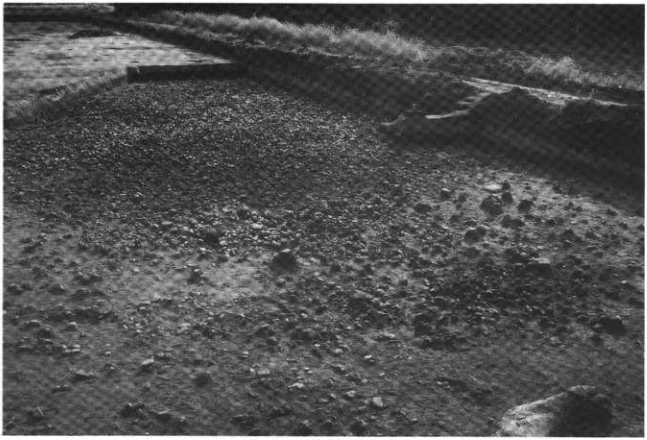
尾平・楢原遺跡、楢原遺跡全景（上空より）

尾平・楢原遺跡調査区（上空より）

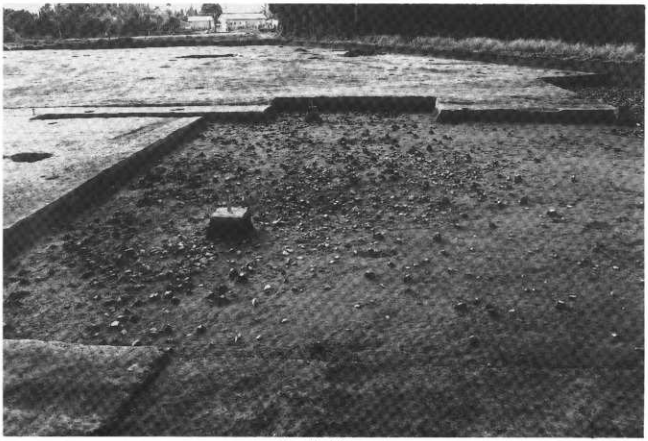
尾平、楢原遺跡層序および1号礫群検出状況（南より）



尾平、楢原遺跡早期面の状況（上空より）



1 号 礫 群 (北東より)

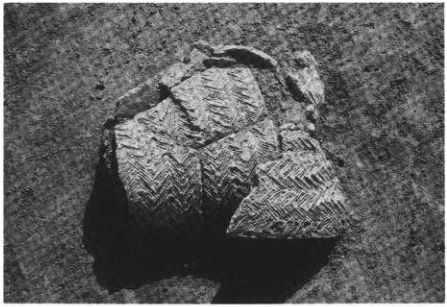


2 号 礫 群 (北東より)

2号礫群集中箇所（北西より）

3　号　集　石（西より）

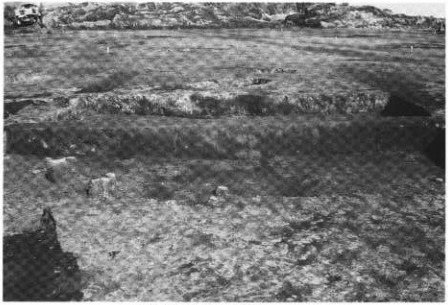
1号礫群集中箇所断面（北東より）



土器1　出土状況（北西より）

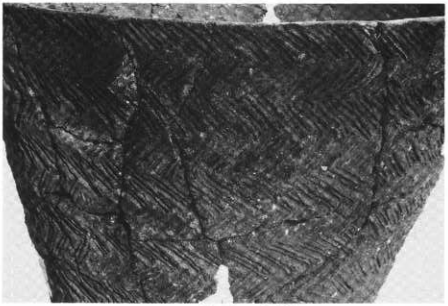
図版4

1 号 住 居 跡 (南西より)



1号住居跡覆土の状況 (南西より)

出 土 土 器 (1)



1 の 器 面 の 文 様

図版 5

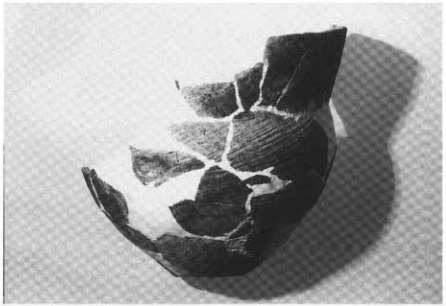
図版 6

出土土器 (3)

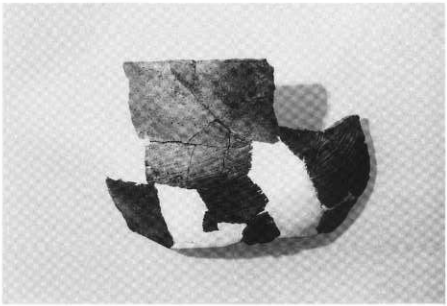
出土土器 (5)

出土土器 (2)

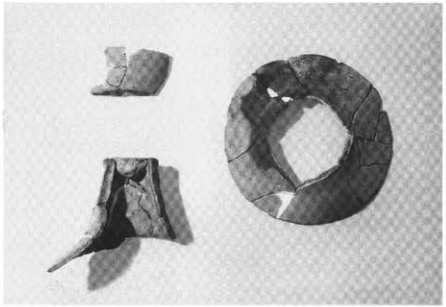
出土土器 (4)



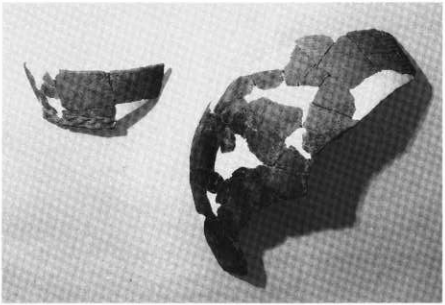
1号住居跡出土土器（1）



1号住居跡出土土器（2）

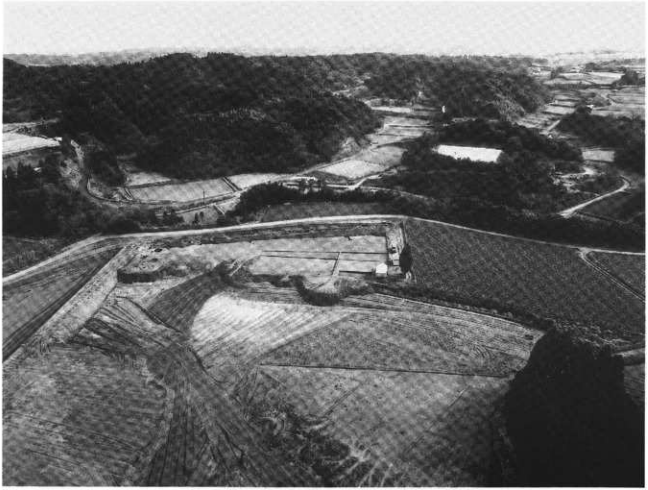


1号住居跡出土土器（3）

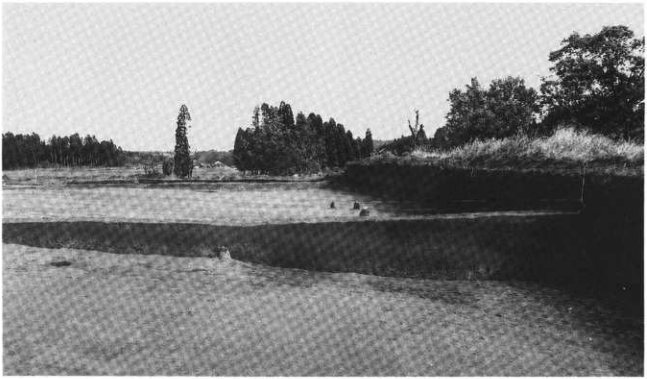


1号住居跡出土土器（4）

図版7



楢原遺跡調査区（上空より）



楢原遺跡Ａ地区上段区の状況（西より）